

中世ロシア文学図書館(X) ステファニトとイフニラト

三 浦 清 美

The Medieval Russian Library (X) Stephanit and Ikhnilat

Kiyoharu MIURA

Abstract

The present author provides the translation and the commentary of the medieval Slavic collection of fables “Stephanit and Ikhnilat”. “Stepanit and Ikhnilat” is an adaptation of the old Indian collection of fables “Panchatantra”, which literally means “five principles”. It was created in India at some time between the 3rd and 4th centuries in the oral tradition for the sake of education of royal children. On that account the work is filled with political and human wisdoms necessary for grown-up governors.

At first “Panchatantra” was translated into Persian in the latter half of the 6th century in the Sasanian Empire. Then Persian writer Ibn al-Muqaffa translated it into Arabic under the title of “Kalila and Dimna”. “Kalila and Dimna” is considered to have been translated into Greek probably from Arabic under the title of “Stephanit and Ikhnilat” in the 11th century. Slavic translation is considered to have come into existence at some time between the 13th and 14th centuries based on the Greek version in some monastery in the Mount Athos.

Slavic versions are classified into three types of redaction: Serbian, Bulgarian and Bulgaro-Russian. This translation into Japanese is based on the medieval Russian of Bulgaro-Russian redaction, revised by O.P. Likhachova.

ステファニトとイフニラト¹

〈解説〉

『ステファニトとイフニラト』は、インドのきわめて古い時代に成立し『パンチャタントラ』の名前で広く知られていた、世界的に知名度の高い文学作品のギリシア語およびスラヴ語版である。『パンチャタントラ』はまず『カリーラとディムナ』という名前でペルシア語、アラビア語版に改作され、その後11世紀にペルシア語、アラビア語版から『ステファニトとイフニラト』という

題名でギリシア語版が制作された。『ステファニトとイフニラト』は、王と賢者の談話という形態で構成された一連の寓話と教訓的物語である。この物語において、賢者は王に教訓を織り交ぜつつ、おもに動物についての興味深い物語を語っている。

スラヴ語の翻訳ができたのはアトス山のスラヴ系修道院のどこかで、13世紀から14世紀にかけてであると考えられる。スラヴ語テキストには、セルビア、ブルガリア、ブルガリア・ロシアの3つの種類の編纂本が存在している。これらの編纂本はその構成によって異なり、そ

Received on August 23, 2016.
共通教育部総合文化部会

¹ この翻訳に用いたのは、O.P. リハチョヴァによる刊行テキストである。Стефанит и Ихнилат (Подготовка текста, перевод и комментарии О. В. Лихачевой) // Библиотека литературы Древней Руси. Т.8. С.210-273, 552-558.

解説、注釈は特別な断りがないかぎり、リハチョヴァによるものである。リハチョヴァは、15世紀の写本(ГИМ, Син одальное собр. №367, лл. 493-548)にもとづいて、テキストの校訂、翻訳、注釈を行った。必要な場合は、2点の17世紀の写本(РГБ, собр. Тихонравова, №249; собр. Толстого: РНБ, Q.XV, 2)、ギリシア語原典によってテキストの補正を行っている。

れらすべてはさまざまな段階において欠陥がある。つまり、ギリシア語の原テキストと比較すると欠落部分がある。とはいえ、これらの編纂本は一つの原本にさかのぼることができることがわかっている。すべての編纂本に共通の翻訳の誤りがあり、このことは翻訳が一つであったことを示している。現存する写本のなかではセルビア語がもっとも完全に近いものであるが、一連の言語的な特徴から、テキストはまずブルガリア教会スラヴ語に翻訳されたことが示唆される。

この翻訳で使用するO.Π.リハチョヴァによる刊本テキストは、ロシア語写本で広く流布したブルガリア・ロシア編纂本に由来する。①テキストが7章に分かれていること、②「インド王の7つの夢」という寓話の途中で話が終わってしまうこと、③「サルと蜚について」と「狡賢い者とめでたい者について」の二つの寓話が「二人の友人について」という一つの寓話に合わさっていることがその特徴である。

ブルガリア・ロシア版の写本伝統は豊かで多様である。写本はテキストのいくつかのバリエーションをもっているが、テキスト間の相違は、テキストの異同と後代の挿入の二つの面から分析できる。写本間のテキストの異同が重要なのは、それらが、中世ロシアの文筆家たちが、自分たちとは異質で、ときに自分たちに不明な箇所をもつテキストをどう受容したかを示唆するからである。ギリシア語からの翻訳のさい生じた誤りの箇所において、テキストの異同が集中的に現われている。テキストを書き写した者がテキストの意味が不分明であることに気づき、ギリシア語テキストを参照することなく、自分の判断にもとづいてテキストを訂正しようとしたからである。そのさいしばしば写本余白部分にテキストの意味を明らかにするための注釈が現われる。このために中世の読者がどう作品を受け取ったかを知るには、写本をすべて見なければならぬことになる。

ブルガリア・ロシア編纂本の著しい特徴は、後代の挿入箇所を多く含む点にある。挿入の多くは、道徳的な観点からのものである。挿入箇所の構成によって、私たちは写本群をグループ、サブ・グループに分類することができる。また、挿入がまったく存在しないテキストもある。ブルガリア・ロシア版の写本における挿入箇所は、おそらく編纂本成立のさいに現われたものであろう。

いずれにせよ、最初期の写本はすでに挿入箇所を含むものであった。テキストから挿入箇所を排除したのは、2次的な編纂の結果である。15世紀の2つの写本（宗務院本とロゴシュスキイ本）の挿入は、写本の余白に注で示されることがある。宗務院本では、抹消されることもある。別個の編纂本となっている15世紀のトロイツカヤ写本においては、すべての挿入は削除され、テキストは短縮され、もっと「世俗物語」的な様相を呈している。

ほかの写本グループにも挿入はあるが、それらは宗務院本のそれとは異なり、挿入のようには見えない場合もある。17-18世紀の多くの写本においては、挿入が削除され、作品の寓話性が戻ってきている。

挿入があることと挿入がないことは、テキストのあった文学的環境と文学的な状況と関係がある。

東方の一連の寓話に接触しながら、スラヴ世界の作者であるアトスの修道士は、作品の寓話的、「世俗物語的」性格には意義を見出さず、その道徳的なアフォリズム性のみを受容した。作者は教訓的側面を強化し、キリスト教の教父の著作家らの引用をつけ加えた。中世文学の環境においては、『蜜蜂（プチェラ）』のようなアフォリズム集、シナイ人イオアの『階梯（レストビツァ）』、ドロフェイの教訓のような訓育的著作が広範に流布していた。これらの作品は、あらたな挿入の原資料ともなった。この結果、ブルガリア・ロシア編纂本の編者にとって、『ステファニトとイフニラト』は寓話の本というよりむしろ（編者にとって、寓話というのは、ジャンルとしてはなじみの薄いものであったらしい）、『蜜蜂』のような警句集であり、伝統にしたがいつつ、自分の選択と趣味に合うように新しい警句を補うことができた。こう考えることで、挿入が行われることになった主題そのものにたいする、なおざりな態度を説明することができる。

挿入部分は、しばしば元のコンテキストをさえぎり、テキストで語られていることと意味的に符合しないばかりか、あたえられたコンテキストのなかで奇妙に見えることさえある。15世紀の文筆家にとって、『ステファニトとイフニラト』の文学的特性はなじみの薄いものであった。この作品では、新しい時代の文学的特性をもっていたからである。

この作品の登場人物は多様である。15世紀の文筆家にとってなじみの深い、それまでの文学のなかでは、すべてははっきりしている。肯定的な人物はよいことを言い、よい行いをするのにたいし、否定的な人物は徹底して邪悪なのだ。作者は明瞭かつ一義的に「寓話のモラル」を表現する。しかしながら、この作品のなかでは、悪漢が賢いことや信心深いことをしゃべり、ときには共感を呼び覚ます。基本にある道徳的指針は不十分にしか表現されないの、読者は自ら出来事の倫理的価値を評価しなければならない。この作品のなかには、注意深く展開を追うべき魅力的な主題があり、独特のユーモアさえある。これらすべてのことは、作者にとっても読者にとっても、それまであまり経験のなかったことらしい。

17世紀に状況は変わった。文学にかんするまったく別の状況が生まれ、大衆小説の諸ジャンルが興り、『イソップの寓話』、『人間の生涯の風景』などのあらたな翻訳が現われ、『ステファニトとイフニラト』も正当な評価がなされた。その語り物としての性格が明瞭に現われ、

写本の伝統のなかに定着した。この作品は別の語り物の作品とともに書き写されるようになった。世態風俗が詳細に描写される部分が多くなり、主題をもった語りが増大したかわりに、作品自体が変容をこうむることになり、挿入部分が消え、別の資料から新たな寓話が入りこむようになった。これにともなって文語的な語彙が部分的に、よりわかりやすい日常的な語彙にとってかわられた。

リハチョヴァはこの刊行テキストにおいて、伝存するブルガリア・ロシア編纂本のもっとも古い写本から、後代の挿入部分を取り除き、作品の中核部分を読者に提示している。15世紀においては、作品のそのような性格は理解されてはいなかったものの、読者はここに、スラヴの文学的伝統におけるもっとも初期の世俗物語の典型を見出すだろう。また、忘れてはならないのは、この作品が「遍歴する主題」、すなわち、さまざまな民族に共通の主題を含むことである。この作品は、たがいに異質なさまざまな文化、文明を経由しつつ、それらの文化の痕跡をとどめながら、全人類的な叢智を携えてスラヴ世界に現われた。

〈翻訳〉

アンティオキア人シフ²の著作。別の者たちは、偉大なる頌歌作者、ダマスクスのイオアネス³の著作と考えている。この著作は、ステファニトとイフニラトと呼ばれる獣についてのものである。

第一の寓話。王の質問。インドの王が自らに伺候するある賢者に問うていわく、「余が欲するに、そなたは例え話をを用いて、愛と友情で結ばれている人々を引き裂いて敵意をいだかせるような、狡猾でずる賢い男を描き出してみるがよい。」

賢者は、答えて言いました。

一人のたいへん有名な商人がいたそうです。男は、その振る舞いにおいて正しい人生を送っておりましたが、その子どもたちはおろかで、怠惰ゆえ何の手仕事も身につけようとはしませんでした。父は訓戒の言葉をもって子どもたちに向いました。

「おお、子よ。この世に生きるためには、三つのことが必要だ。十分な富と、人々から受ける名誉と、その恵みを正当な手段で手に入れることである。これら三つのことは、そのほか四つのことを守ることによってしか、手に入れることができない。富は公平で祝福された手段で形成されるべきものである。手に入れたものは正しく

使い、蓄えられなければならない。手に入れられたものから困窮する人々に施しをしなければならない。これは来世のために役に立つであろう。そして、できるかぎり降りかかる災いから逃れなければならない。以上である。この三つのうちどれかが欠けたとしても、誰もうまくはいかないだろう。もしも富を得ることができなければ、自らの能力を縦横に発揮することも、他人のためになることをすることはできない。もしも金持ちになっても正しい人生を送ることができなければ、やがては乞食の仲間入りをする。もしも食べ物もろくに取らないならば、その富はいっこうに増えず、少しずつ掘り崩されていくだろう。財産がたまってその使い方が悪く、必要なときに財産から必要なものを使わないならば、そのような人間はたとえ豊かでも乞食と言われても仕方がないし、そういう人間自身が、身の破滅の元凶になる。水道管に水があふれ、出口が見つからないときに、水道管は破れるものだ。」

子どもたちはこの教訓を聞き、父の助言にしたがいました。そのうちの一人が商売のために送りだされました。その子は、二頭の雄牛に繋がれた一台の荷馬車を伴っていきました。道中、そのうち一頭の牛が、沼にはまりこんでしまいました。商人と奉公人たちは駆けつけて牛をぬかるみから引っ張り出したものの、牛をその場に残しておかざるを得なくなりました。牛はひっぱりあげられているあいだに、すっかり力を使い果たし、その場に立ち止まったまま身動きができなくなってしまったのです。牛は何をしてよいかわからず、鳴き声もあげずに右往左往していましたが、食用になる草と水のゆたかな、とある草原を見つけました。しばらくすると、この雄牛はすっかり肥え太って角で地面を掘り、大きな鳴き声を上げるようになりました。

この場所の近くに、とある王のライオンがいました。この王のもとに、さまざまな種の動物がいました。たとえば、ライオン、クマ、オオカミ、キツネ、そのほかの動物たちです。ライオンは傲岸不遜で誇り高かったのですが、知恵が乏しかったのです。雄牛の鳴き声を聞くと、ひどく怖くなりました。しかし、自分の怖い気持ちを誰にも気取られたくなくて、あたりをうろつかず一つの場所にじっと立っていました。その場所に、二匹の動物がいました。一匹はステファニトという名前で、もう一匹はイフニラトという名前でした。二匹の動物は知恵に秀でていましたが、ことにイフニラトはたいへん狡猾な心をもっており、望んだものを得るために何をすればよい

² 『ステファニトとイフニラト』の作者とされている。この名前、アンティオキア人シフは、ギリシア語の写本に現われる名前である。シフはアンティオキア宮廷のプロトヴェスティアリ（官職名）であった。このために、スラヴのテキストでは、「アンティオキア人」という名前があらわれた。一部のスラヴ語写本では、作者はたんに「アンティオキア人」、あるいは、「偉大なるアンティオキア人」となっている。

³ 8世紀ビザンツの有名な教会人、頌歌、祈祷文作者。シリア人。スラヴの文語文学の伝統においてはしばしば、作者不詳の作品が金口イオアネスやダマスクスのイオアネスの作品とされた。

かわかっていました。

イフニラトはステファニトに言いました。「友よ、私たちが見るところ、ライオンは凍った氷のように身動き一つしないが、それはどうしてなんだろうね。ライオンっていうのは、暴力をふるうものじゃないか。」ステファニトは言った。「どうしておまえさんはそんな人聞きの悪いことを訊くのかね。僕たちには悲しいことも困ったこともないじゃないか。僕たち、王様の城門のまえに座って王様から毎日のおまんまをいただきながら、王様のことをああだ、こうだ、ああでもない、こうでもない、したり顔でおしゃべりするの是不謹慎だと思ふんだ。ほっとこうじゃないか。こんな不謹慎なことを言ったり、したりする奴は、ヒヒの身に起こったようなつらい目にあうのさ。」

二人は話をはじめました。ヒヒが、木こりが丸太を二つに割るのを見ていたところ、木こりが何かの用でどこかに行ってしまったので、ヒヒは木こりの真似をして、木のうえに座ってそれを二つに割ろうとしはじめました。ヒヒのおちんちんが木の割れ目に入ってしまったのですが、ヒヒはそれに気づかず楔を引き抜きました。木の割れ目はバチンと閉じ、おちんちんが挟まれてしまいました。ヒヒが痛みのために気絶していると、木こりが帰ってきていっそうひどく懲らしめられました。

イフニラトは言いました。「君が言うことはよくわかったよ。ただ知ってもらいたいことは、王に伺候するすべての者は、生活の糧のためではなくて、友人を喜ばせ、敵どもを悲しませる名誉が欲しいために、王のお側に行くってことさ。貧しい、位の低い連中は、ちょっとした生活のゆとりが嬉しいものさ。連中にとっちゃ、手あたり次第さぐって何かが見つければ、もう十分なんだ。犬が骨を見つけると、それにむしゃぶりつくようにね。

だけどね、靈感を吹きこまれた者は、程度の低い馬鹿げたことと折り合いをつけることができないものさ。そういう奴は、もっと高いものを探し、立派なことをやり遂げようと一生懸命だからね。ライオンはウサギを捕まえても、ラクダを見つければ、ウサギをほっておいてラクダを追いかける。君、聞いたことないかい。犬は餌をもらうまえに尻尾を振るけれど、大きなゾウは食べたい素振りを見せず食べ物に触ろうともせず、どうぞ食べてくださいといわれてはじめて食物を口にすること。靈感を受けた気前のいい者は、たとえ長く生きられなくとも、長寿を全うした者たちの仲間に加えられるけれど、空虚で貧しい暮らしを送り、自分にも他人にも何のためにならなかつた者は、どんなに長生きしたって、短命で不幸でしかないものさ。」

ステファニトはこれ聞いて言いました。「君の言いたいことは、わかったよ。でもね、各人各様に分(ぶん)っていうものがあることを知ってもらいたいね。も

しも誰かが同じように、敬意を払われている者に敬われたとしたら、自分の立場に満足するはずさ。もしも僕らがそうであるなら、僕らは喜んで僕らの分を受け入れるはずさ。」

イフニラトは言いました。「人生の目的は、誰も似たようなものだよ。だからこそ、知恵を授かった者は昇っていくことになっているし、つまらない人間は落ちこちるのさ。下にいる者たちが上に昇るのは、それはたいへんなことさ。上から下に行くのはあつという間だけけれど。昇ることなんて、めったにないさ。だから、僕たちは力のかぎり高きにあるものを求めなけりゃいけないんだ。今いる場所にじっとしているだけじゃなく、向こう岸にわたらなくちゃならない。だからこそ、ライオンと話すことで、ライオンのぶち当たっている困難から、何か大切なものを引きだしたいと思う。僕が見るところ、ライオンは配下の兵士たちと一緒にいても、怯えのあまりぼっとしているようだね。僕はこの状況から何か得になるものを引きだしたいんだよ。」

ステファニトは言いました。「ライオンがビクビクしてるって、どうしてわかるのさ。」イフニラトは言いました。「頭のいい奴というのはね、隣にいる奴が何を考えているか、そいつの仕草や顔つきでわかるものなんだ。」ステファニトは言いました。「王様にお仕えたこともないし、王様とお喋りする技もないのに、どうやって王様からご褒美をもらうのさ。」イフニラトは言いました。「頭のいい奴というのはね、経験がなくてもどう振る舞えばよいか、わかっちゃうんだ。馬鹿な奴は、覚え慣れたことでも誤りを犯すものだけれど。」ステファニトは言いました。「王様っていうのはね、自分より勝る者が何を言っても聞かないものさ。王様は自分の側近たちの言うことしか聞かない。ぶどうの蔓と同じことさ。ぶどうの蔓も大きな枝を選んで絡みつくんじゃなくて、隣の蔓に絡むだろう。だいたい王様のお側にお仕えているわけでもないのに、どうやって王様に近づこうっていうのかい?」

イフニラトは言いました。「たしかに君の言うとおりのさ。それは真実だね。けどね、僕らの仲間でも、はじめは大したことがない身分でも、下から這いあがった奴だっているだろう。僕が目指すのはそれさ。ある若者が王の門の脇に座っていたんだが、誇りなんかかなぐり捨てて、憤りを抑えて、不便を忍び、あらゆる人に従って、一刻も早く王の傍らにお仕えしようとした話があるじゃないか。僕はそうしようと思ふんだ。王様の近くに行くことができれば、王様の癖や気性がわかり、どんな狡い手段を使っても、すべての点で王のお気に召すようにふるまおうと思う。そうしたら、ライオンは僕を愛するようになり、ほかの連中より飛び抜けて高い位につけてくれるだろう。頭のいい賢い奴はね、真実を歪め、嘘話を

作ることができるんだ。技の巧みな書き手は、真実を曲解してその時々にあふさわしいお話を拵えるものさ。」

すると、ステファニトは言いました。「もしも君がほんとうにそんなふうにするなら、王様に近づくのはやめたほうがいいね。賢い奴ならこれから僕が言う三つのことはやらないものさ。もし思い切ってやってしまったら、助かる見込みはない。つまり、王様に近づくな、試しに毒を飲むな、女に秘密を打ち明けるな、さ。王様っていうのは、陰しくて人を寄せつけないが、いたるところに果実があり、湧き出る泉がある山のようなものなのさ。山に登るのはかんたん、でも、そこに居つづけることは災難だね。」

イフニラトは言いました。「君の言うとおりのさ。でもね、思い切って危険を犯すことができないような奴は、望むものを得られない。恐れてばかりいる奴は、誰にも敬われない。よく言われるように、臆病な奴は三つのことをやりたがらないものさ。王様に仕えること、海を航すること、敵にただちに反撃すること、さ。けれど、偉い奴には、二つの場所がお似合いなんだ。王の宮廷にいることと、砂漠で砂漠の修道士たちとともにいることさ。それは、ゾウに砂漠と王の宮廷がお似合いなのと同じことなんだ。」すると、ステファニトは言いました。「こんなこと、話していてもきりが無い。行って好きなことをするがいいさ。」

イフニラトはライオンのところいき、ライオンに深々とお辞儀をしました。ライオンがイフニラトにたずねました。「おまえはこんな長いあいだ、どこにいたのだ。」イフニラトは言いました。「何かのことで陛下の王国の御ためにお役に立つよう、王様の城門の傍らに座っておりました。ときには、つまらない者でも何かのお役に立つことがある、しかも重要なことに限って有用だということ、私は知っているからです。地面に打ち倒された木も、耳を搔くのに役に立つこともあるというわけです。」ライオンはこの言葉を聞いて配下の者たちに言いました。「よくあることだが、どんなに際立った知恵をもち、雄弁な者も、話しだしてみなければ、それと気づかれることはない。茨のなかに隠れていた炎が、外に現われたときにだけ、空中に炎を噴き上げるようなものだ。」

イフニラトは王に気に入られたと悟ると、間髪を入れずこう言いました。「おお王様。王の奴隷は、王様に話すのにふさわしい、有益なことだけをお話しすべきです。しかるのちに、その奴隷はお役に立った分だけご褒美を受け取るでしょう。なにしろ、地にまいた種だって、地から芽吹くまではそれがどんな植物かはわかりません。それと同じように、人間もその話す言葉でしか、それがどんな人間かはわからぬものです。王たるもの、頭の飾り物を足にぶら下げてはなりませんし、足のそれを頭に

つけてはなりません。宝石や真珠を錫とごっちゃにする者は、真珠よりも自分自身に恥をかかせるものです。

公たるもの、公よりも位が下の者たちをよく調べるのがふつうです。軍司令が兵士たちを点検するように、王は雄弁なる賢者を点検します。君主は助言の量ではなく、その質によって、自らの意志を成就させるものです。君主たる者、配下にいる小さき者たちを軽蔑せぬお心かげが必要です。というのも、偉大なる者のお役に立ったことで、小さき者はすでに小さき者ではないからです。権力を握る者は、生まれの高い栄えある者たちだけではなく、敬意に値する雄弁な者たちを厚遇しなくてはなりません。自分の配下の者たちに満足するだけではなく、遠方から賢者を招かなくてはなりません。

私たちにとって、自分の身体ほど近いものはありません。時に応じて、身体の手入れをします。しかし、病気になると、遠くまで医者を探しに出かけます。王様の宮殿には、たくさんのネズミがおりましょ。ですが、ネズミなどに用はありません。でも、近くにいる以上、仕方がないのです。タカという名の鳥がおります。野生の鳥です。ですが、獲物を獲るという習性があるので、呼び寄せられ、世話をされ、王の腕に止まるのです。

この言葉を聞いてライオンは大いに恐れ、周りの者たちに言った。「権力を握る者は、たとえ生まれの卑しい者でも、知恵ある人間を蔑ろにしてはならない。あらゆる者は、もっている美質によって報いられなければならない。たとえ、それに不満をもつ者がいようとも。」

イフニラトは、ライオンが自分に心服しているのを見ると、王が一人になったところを見計らって、言いました。「おお王様。なぜあなたは長いあいだずっと一つの場所にとどまり、どこかほかの場所に行こうとしないのですか。」ライオンは自分がビクビクしていることを隠そうとしたが、話しているあいだにちょうど雄牛が鳴いたので、驚きのあまり次のように言いました。「私はこの動物が怖いのだ。鳴き声を聞けば、身体がどんなだろうと思ひ、身体がどんなだろうと思うと、力はどんなだろうと思ひ、力がどんなだろうと思うと、その知恵はどんなだろうと思ってしまうのだ。もしもこの動物が私の想像のとおりだったら、私はここから逃げ出そう。」イフニラトはこれを聞いて言った。「王様、恐れることはありません。どんなにやかましく聞こえようと、力強い声と言ったってたかが知れています。」

こういう話があります。あるとき、お腹の減ったキツネが食べ物を探して歩いていると、ある物を見つけました。タンバリンという名の太鼓でした。それは木にぶら下げられていたのですが、風に揺られて音を出していました。キツネはこれを見ると、太鼓のかたちが妙ですし、大きな音も聞こえたので、怖くて近くに寄ることができなかった。ですが、飢えに苛まれどうしても食べたくなっ

て、思い切って力いっぱい太鼓に飛びつき、引き裂きました。でも、そこには何も入っていません。そこでキツネは言いました。『なんてこった。こんなろくでもない代物が、バカでかく見えて、けたたましく音を立てていたなんて。』

おお王様、いま私たちの身に降りかかっているのも同じことです。私たちはあの獣の声に誑かされて怖いと思っただけです。もしも陛下がお望みなら、私が行ってどんな奴かを見て、すぐに陛下のもとに戻ってまいります。」

ライオンはイフニラトを遣いにやりました。というのも、イフニラトの言葉はライオンを慰めたからです。ところが、イフニラトが立ち去ると、ライオンはイフニラトを遣いにやったことをひどく悔いて、心のなかでこう考えて言いました。

「私としたことが何ということをしたものか。どうして、私は自分の心をイフニラトなどに打ち明けてしまったのだろう。君主たるもの、自らの内心の言葉と秘密を、かつて軽蔑を受けたり財産を奪い取られたり名誉を失ったりした者や、貪欲で狡猾なその類の者に打ち明けてしまうなど、あってはならないことだ。というのも、イフニラトは飛び抜けて知恵が働いたものの、私の城門の傍らに打ち捨てられていた。そのゆえに私には邪（よこしま）な仕え方をしているのだ。そうでなくとも、この声の大きな獣がじっさいに力が強いことがわかれば、イフニラトはこの獣と近づきになり、私が無力であるということも教えてしまうだろう。」

ライオンがこんなことをつらつらと考えていると、様子を見たイフニラトが一人で帰ってきました。ライオンはイフニラトを見ると、喜んでこう言いました。「おまえは何をしてきたのだ？」イフニラトは言いました。「私はこのけたたましい鳴き声を出す獣を見てきたのです。雄牛でした。私はこの獣に近づいて話をしてきました。この獣は私に何の害も及ぼしませんでした。」ライオンは言いました。「おまえに害を及ぼさなかったからと言って、力がないなどと思ってはならんぞ。大風や嵐は小さな木々には無害であっても、大木を折り、根こそぎ引き抜くこともある。」

イフニラトは言いました。「おお王様。この動物が一番強いなどはお思いになりませぬよう。お望みであれば、私がこの動物を陛下のもとに連れてまいります。そなたのお力のもとでは、この動物もそなたにおとなしくつき従うであります。」ライオンは大喜びでイフニラトに自分に約束したことをおこなうように命じました。

イフニラトは雄牛のところに行き、ぬけぬけとこう言いました。「かしこくもライオン様がおまえのことを連れてくるようにと、私をおまえのもとに遣わした。もし

もおまえが言うことに従い、みながそうしたようにライオン様のところに参上すれば、いままでライオン様に目通りを願わなかった無礼を赦してやる。いやしくも目通り願わねば、そのときは万事おまえのことをライオン様に申し伝えることにする。」雄牛は言いました。「おまえを遣わしたライオン様というのは一体誰で、どこにいるのか。」イフニラトは言いました。「ライオン様は獣たちの王で、この場所に自らの軍勢とともにおられる。その場所へは、私がそなたを案内しよう。だから、そなたは私についてくるがよい。」

雄牛はびっくり仰天してイフニラトのあとについてライオンのところに行きました。ライオンは、雄牛が自分が聞いた声にもまさる体躯をもつことを見て丁重に彼を迎え、いろいろと問いました。雄牛はライオンに自分のことをすべて伝えました。ライオンは雄牛にありとあらゆる恩恵をあたえることを約束し、雄牛に大きな権力をあたえ、彼をすべての者より高い位につけました。

イフニラトはそれを見て雄牛がうらやましくなりました。羨望を抑えることができなくなったイフニラトは、自分の親友のステファニトにこう言明しました。「君は僕が自分の身に何をしたかを見て、驚かないかい？だって、ライオンには恩恵をほどこしてやって、僕はこんなしけたざまなんだからね。僕は雄牛をライオンのところに連れて行ってやったさ。そしたら、あいつ、僕を飛びこして高い位についちゃったんだ。」

ステファニトは言いました。「君は一体何をやらかそうとしているんだい？」すると、イフニラトは答えました。「僕はね、まえのように尊敬される高い地位に昇って、その地位にとどまりたいんだ。賢い奴というのはね、三つのことをしっかり守らなくっちゃいけない。何よりもまず、悪いことと善いことを経験したとき、その原因が何か見極めること、善を求め悪を避けること、そのことで目の前にある悪と善をきちんと見極め、将来のことを考えること、さ。僕はね、まえのように尊敬される高い地位に昇って、その地位にとどまるって決めちゃったんだよ。それにはどうすればよいか。それにはね、雄牛をひと思いに殺してしまうことのほかに、ふさわしい手段がないんだよ。これは僕にとって有益だし、ライオンにとっても有益さ。」

ステファニトは言いました。「雄牛がいたからといって、取り立てて悪いことが起こらなかったように見えるけれど。」イフニラトは言いました。「ライオンはすっかり雄牛に取り込まれちゃって、ほかの連中はどうだってよくなっちゃっただろう。六つのことのために、王様は危ないところにいるんだぜ。じきに王位から追い落とされるさ。つまり、適当な機会を見つけないのに脅しをかけること。穏やかにいるべきときに怒りまくること。賢くて自分に忠実な助言者がいないとき。恐怖に駆られて

自分の配下の人々を迫害するとき。理不尽な欲望に打ち負かされるとき。こみ上げる怒りに打ち負かされるとき。ときに応じてこのような状況を利用することが必要なのさ。』

ステファニトは言いました。「ライオンは君よりずっと力が強いし、友だちも助けてくれる奴もたくさんいるのに、どうやってライオンに危害を加えようというんだい。」イフニラトは言いました。「僕が力がなくて小さいことは気づかないふりをしておくれよ。多くの力の強い者たちが力の弱い者たちに打ち負かされることはあったんだから。」

こういうお話があるのさ。山の木のうえにカラスが巣をつくったんだけど、ここではいつもヘビから加えられる危害を耐え忍ばなくてはならなかった。ヘビは雛鳥を一飲みにしたのさ。ヘビは何度も何度も雛鳥をつけ狙った。そこでカラスは自分の親友である、ある獣のもとを訪れて言った。『私の相談に乗ってくれないか？ご存じのように、私はどれだけヘビのために苦しんできたことか。私が思うに一番いいのは、ヘビが寝ているときにそっと近づいて、その目を啄んでやることだね。』獣は答えた。『君の思いついたことはどうも感心しないな。ヘビを殺し、自分が無傷でいられるような別の策を考えたいほうがいい。でなきゃ、ツルの身に起こったのと同じことが君の身に起こるかもしれないからね。』

その話はこうだ。あるツルが魚のたくさんいる湖に住んでいて魚を食べて暮らしていたんだが、年老いて漁に出かけられなくなった。ツルは飢えに苛まれて苦しんだ。ツルは悲しみに暮れ、山に出かけたが、登っていく途中、ハリネズミを見つけた。すると、ハリネズミは言った。『《どうしてあんたはそんなに嘆き悲しんでいるのかい？》ツルはそれを聞いて言った。《これが悲しまないでいられるもんですか。私はずっと湖に住んでいて魚を取って暮らしていたの。大きな魚がそれはそれはたくさんいたわ。でもいま私は、二人の漁師がこの場所に来たことを見たの。漁師たちは湖の魚を全部取りつくしてしまうでしょう。》すると、ツルからこのことを聞いたハリネズミは、魚のところに行き、彼らにいま聞いたことを話した。魚たちはツルのところに姿をあらわして言った。《どうぞ相談相手になってください。私たちは、漁師が来て私たちを取りつくそうとしているという話を聞きました。》ツルは言った。《ここから、淡水の別の場所に移るしか、方法がありませんわ。》魚たちは言った。《どうぞ私たちを、たくさん食べ物があって、差し迫った危険から逃れることができる場所に移してください。》ツルは言った。《まだ移住が終わらないうちに、漁師たちが来てしまうかもしれないわ。でも私ができることをして差し上げます。》こう言ったか言い終わらないうちに、ツルはすこしずつ魚を切り立った崖に運び、そこで魚を食

べた。ほかの魚たちは、ツルが自分たちを約束の場所に運んでくれているものと考えた。あるとき、ハリネズミが自分も魚と同じように別の場所に運んでほしいと頼んだ。ツルはハリネズミを啜ると、魚を食べていた断崖に運び、べろりと食べしてしまおうと考えた。そこかしこに魚の骨が散らばっているのを見ると、ハリネズミはツルの奸計に気づき、ひそかにこう考えた。『《ツルに抗おうと、ツルの言うなりになろうと、僕は無理やりに殺されちゃうな。みっともない死に方だけはしないと、僕は心に誓おう。気もちのまっすぐな人間にふさわしいように、立派に生き残るか、立派に死ぬか、だ。》』すると、ハリネズミはいきなりツルの首のあご骨をつかんだかと思うと、それを力いっぱい締めつけた。

カラスさん、僕がこんな話をするのも、戦いをしかける者は自分で作った網に引っ掛かってしまうということ、君に知ってもらいたいためさ。ヘビを死に追いやることが必要なんだが、君はヘビを殺し、なおかつ自分は無傷で生き残りたいと思っているだろう。それなら、下界に行って女性の美しい服を探し、それを盗んでくることさ。その女性の美しい服をヘビの巣までもってきて巣にかけておく。そうすれば、服を探しに来た人がヘビを見つけて、そいつを殺してくれるだろう。』結局、このとおりになった。カラスは言われたとおりにして、ヘビの惨害から逃れたのさ。』

イフニラトはステファニトに言いました。「僕がこんな話をするのは、知恵は力よりも強いということ、君にわかってもらうためさ。」すると、ステファニトは言いました。「もしも雄牛がその勇気にふさわしいほど賢くはないんだったら、僕は君の言葉に同意すると思う。だけどね、雄牛は勇気があると同時に、賢いんだよ。」イフニラトは言った。「君の言うことは正しいよ。雄牛はじっさいそのとおりさ。だけど、僕は巧みな計略で雄牛を破滅させてやる。僕は勇気をもってやり遂げるさ。たくさん前例もあるしね。だって、ウサギがライオンを追い落としたことだってあるんだぜ。」

こういう話がある。一頭のライオンが草原に住んでいた。草原は水と草に恵まれていたので、さまざまな種類の獣たちが住みかになっていた。この草原は、惜しみなく彼らに食べ物と飲み水をあたえ、恩恵をほどこした。けれども、獣たちはライオンにたいする恐怖のあまり震えあがっていたので、話し合いをしてライオンのもとにゆき、こう言ったんだ。『王様、僕たちは、どうやったら王様があくせく働いたり、あれこれ心配りしたりしないですむか、どうやったら自分たちが安全に暮らせるかを、みんなで話し合いました。僕たちの誰かを狩猟するとき、たくさん働いて汗を流されますよね。僕たちだって、あなたの狩りを恐れてブルブル震えているんです。必要なことは、あくせく働かずに毎日私たちがあなたの食卓

を飾れることですよ。』

これをライオンは気に入った。何日も過ごしながら、獣たちはたがいにくじを引きあった。くじに当たった者が、ライオンのもとに送られるということさ。くじがウサギにあたったとき、ウサギは獣たちに言った。『獣たちよ、もしも僕のいうことを聞いてくれるんなら、僕らが耐え忍んでいる義務からみんなを解放してあげよう。』彼らは言った。『おまえの言うとおりにしよう。』ウサギは言った。『僕を連れていく者に、ゆっくり僕をライオンのところに連れていくように言ってくれ。ライオンに近づいたら、みんな隠れてくれ。僕が声をかけるから。』みんなはそのようにした。

ウサギが抜き足差し足で歩いていくと、ライオンが空腹のあまり怒り狂っていた。ウサギはたった一匹でライオンのまえに現われると、ライオンは言った。『なぜ貴様はいままでらくらしておったのだ。ほかの奴らのように、なぜ貴様は早く来なかった？』ウサギは言った。『僕、友だちのウサギを連れてきたんです。だけど、どっかのライオンが僕と出会って、そのウサギを捕まえちゃった。どんなにこのライオンにそのウサギを返してくれるように頼もうと、ぜったいにこのウサギは自分のものだと言って、そのライオンは僕のいうことを聞きません。もしもお望みなら、僕があなたをそのライオンのところに連れていきますよ。』

怒り狂ったライオンはウサギに言ったわけさ。『そいつがいるところに案内せい。』ウサギはライオンをある深い井戸のところに連れて行って、例のライオンが見えるから、この井戸に身を屈めるように、と言った。ウサギもライオンといっしょに井戸のなかへ身を屈めて言った。『あなたのウサギを盗んだライオンが見えるでしょう。このウサギはもうあのライオンのものなんですよ。』そして、ウサギは水に映ったライオンと自分の姿を指し示した。これを見て、水面に映った姿が実物であると思いきんだライオンは、井戸に飛びこんで溺れ死んだとき。』

すると、ステファニトは言いました。「もしも君が、雄牛がライオンの敵で、雄牛を殺せるとするのなら、事をはじめたらいいさ。」イフニラトは言いました。「君だって、僕だって、僕らのほかのたくさんの方たちも、雄牛がちやほやされたおかげで、蔑ろにされる憂き目を見ていたんだ。もしも君がこれをできないんなら、そんな目論見はよしたほうがいいさ。だって、これは破廉恥きわまりないことだし、罪なことだからね。」

こんなことがあってから、ある日、イフニラトはライオンのもとにやってきました。イフニラトはすっかり悲しみに暮れていました。ライオンはイフニラトに悲しみの原因は何かとたずねて言いました。「いったい何が起こったのか?」「あなたにとっても、私にとっても、害

のある、あることが起こったのです。しかしながら、誰かが意見を言おうとして、その意見がそれを言う相手にとって面白くないことがわかっている場合、話せば相手の利益になるものだったとしても、もうこれ以上話そうという気が起こらないものですが、自分の話が相手の気になっていることがわかっているならば、きちんと筋を立てて一生懸命話すものです。

おお王様、私はあなたが知恵と賢慮に恵まれている方であることを知っておりますので、あなたがお聞きになりたいとお思いにならないことについて、あえて畏き陛下のお耳に申し上げることに決めました。私の勤めが衆目にも明らかで正しいものであることを、陛下はご存じですし、私の言葉のなかに陛下にたいして真実が顕われることを願っております。私たちの魂は死ぬまであなたのものでありますから、有益で必要なことを陛下に隠しだてするのは、あってはならないことです。奴隷が自らの主人に隠しごとをするなど、もつてのほかです。それは病人が医者に分病を隠してはいけないこと、乞食が自分の貧しさを友人たちのまえで取り繕うべきでないことと同じように自明なことです。

私はある信用すべき人物から、雄牛があなたの貴顕たちに向けてこう言ったことを聞きました。『私はライオンを試した。徹底的にその勇気と知恵を調べ上げ、勇気も知恵も大したものではないことがわかった。』おお王様、この言葉から、雄牛が恥知らずで意地が悪いことがわかりました。陛下は雄牛をあらゆる人々の上の身分に取り立て、陛下に匹敵する位につけてやったのに、雄牛にはそれだけでは足りず、あなたを殺そうと考えて四六時中その機会をつけ狙い、陛下の権力を奪い取ろうと陰謀を張りめぐらせています。それが暴かれた暁には、雄牛が自分の意図を完遂するまえに、王がこの者に死を賜ることが必要です。もしそうなれば、我々臣下は枕を高くして眠ることができます。

概して、十分に賢い人間はあらゆる手を尽くして不幸な事件を避けようとするものです。それより賢くはなく臆病な人々は、道を踏み外してはじめて、救済を求めます。まったく愚かな人間は、道を踏み外したら、もう救済を望むことはムリでしょう。これは三匹の魚に起こったこととたいへんよく似ています。

こういう話があります。川の近くにある、ある湖に三匹の魚が住んでいました。そのうちの二匹は賢く、もう一匹はちょっと賢く、もう一匹はバカでした。あるとき、こういうことが起こりました。湖のほとりを二人の漁師が歩いていました。彼らは、戻ったらこの魚を捕まえてやろうと話していました。賢い魚がこの言葉を聞くと、湖をあとにして川に逃げこみました。残りの二匹の魚は、助かるためにはどうしたらよいかをまったく考えずに、湖に留まっていた。そこへ、漁師がやってき

て湖と川のあいだをがっちり仕切ってしまいました。

これを見て、中くらいの賢さの魚は、自分ももっとまえに外に泳ぎ出しておかなかったことを後悔して、次のような独り言を言いました。『怠け者というのは、こういう結末を迎えるものなんだわ。今となつては、どんな計略を用いれば、助かることができるかしら。どんな努力をしたってムダだというなら、それでもいいわ。自分が助かるために役立つようなことを、自分の力のおよぶかぎり考えてみましょう。』そこで、魚は死んだふりをしました。まるで死骸のように、波のうえを運ばれていきました。漁師たちはそれが死んだ魚だと思い、両手でその魚をつかみ、川と湖の境に置きました。すると、魚ははねて川に飛び出して助かりました。バカな魚はあちこち泳ぎ回った挙句、悪運尽きて捕まえられてしまいました。』

ライオンは言いました。「その例え話はわかった。だがな、雄牛が狡猾であると、俺には思えないのだ。というのは、雄牛は俺から悪いことをされたと思っていないからだ。」すると、イフニラトは言いました。「だから、そなたから悪いことをされたとは思っていないからこそ、雄牛はそなたに奸計をしかけているというのです。そなたは雄牛を高い位に引きあげました。そのゆえに、そなたの地位のほか、彼には羨むものがないのです。

その類の人間は、自分にはふさわしくないその地位につくまではおとなしくしていますが、いったんその地位につくと、奸計でもって別の地位につくことを望むものです。自分のほんとうに欲しいものを手に入れる、それだけのために彼は王にお仕えしているのです。彼は望むものを得るまでは柔和なそぶりを見せていますが、まんまとこれをせしめると、ふたたび自らの腐れきった習慣に戻ります。生まれつき曲がってまっすぐになることのない犬の尻尾は、紐に結わえつけられ引っ張られたときにだけ、まっすぐになります。紐が解かれると、いつものように、すぐに曲がって丸まってしまうものです。

王様、どうぞご理解ください。自らの友人の友愛に満ちた助言を受けられない者は、苦いからといって病気に効く薬を捨てたり、服用しなかったり、医者のことを聞かない病人に似ています。よく言われるように、悪い助言者と暮らすよりも、炎やヘビの群れのなかを歩くほうがましです。』

ライオンは言いました。「おまえの言うことは、常軌を逸しているが、一理ある。雄牛が私の敵だったと認めよう。だが、奴は俺様に危害を加えることはできんぞ。奴が食うのは草で、肉ではない。略奪者だと分かれば、俺様が食ってやる。』

イフニラトは言いました。「そんなお考えに誑かされるのは、お止めください。その誠実さと友情がほんものだとわからぬうちに、御馳走をしてくれる者に自分の秘

密を打ち明けてはいけないと、人はよく言います。あなたの身にシラミに起こったようなことが起こりませんように。

あるシラミがさる貴顕の身体にしばらくのあいだ隠れ、静かに這い回ってその生き血を吸っていましたが、気づかれることはありませんでした。ある夜、シラミのところにノミがお客にやってきて、何の考えもなしにだしぬけに眠っている男を一噛みし、男を起こしてしまいました。すると、男はすぐに寝台から起きると、探し回った挙句、シラミを見つけて殺してしまいました。ノミは跳びはねて無事助かりました。もしも陛下が雄牛を怖いと思わなくても、そなたの配下にいた者たちが反乱に立ちあがれば、そなたは恐怖を感じるでしょう。』

ライオンはイフニラトの言葉を信じてこう言いました。「それでは、どうすればいいのだ？」イフニラトは答えてこう言いました。「腐った歯は引っこ抜かなければ治療することができません。悪い食べ物の毒は吐き出さなくてはなりません。」ライオンは言いました。「それでは俺様が、どこなりと好きどころに立ち去るがいいと言おう。そうすれば、俺は恥辱と災難をこうむらず、かの者が俺に示した勤務と友愛にたいして、悪で報いたことにはならぬであろう。』

イフニラトは言いました。というのも、ライオンと雄牛が腹を割って話しあったら、自分の姦策がばれてしまうということがわかっていたからです。だから、イフニラトはライオンに言ったのです。「私には、それはあまりよい策であるように思われません。もしも雄牛が、そなたが自分を嫌っていることがわかったならば、彼はそなたに反抗し、戦う準備に取りかかるでしょう。賢い王は、あからさまに罪を犯した者にたいしては、衆人環視のもとで刑を執行しますが、こっそり罪を犯した者にたいしては、ひそかに刑を執行するものです。』

すると、ライオンは答えました。「もしも王が、真実と公正な裁判ではなく、誹謗中傷にもとづいて誰かを刑罰に処したならば、何よりも自らを貶めたことになる。それがゆえに、王は人々のまえで大いなる恥辱をこうむることになるだろう。」イフニラトは言いました。「雄牛がそなたのもとに来たら、よくよく腹を据えて彼を見つめるがよいでしょう。ご自身のその目で、彼が腹黒い陰謀者であることがわかるでしょう。雄牛がすっかり面変わりし、肢体が震え、身体を右に左にゆすぶって、角で突こうと身構えるのがわかるでしょう。」ライオンは言いました。「そういう兆候が現われたときには、そなたのいうことを信じよう。』

イフニラトはこっそりと雄牛のもとにゆき、彼をライオンのもとに参上させるよう画策しました。もしもライオンが命じもしないのに自分が雄牛と話しこむようなことがあったら、ライオンは自分が嘘をついていると感づ

いてしまうと思ったのです。そこで、このように言いました。「王様、もしも陛下がお命じになりますなら、私が雄牛のところに行き、彼の様子を見てまいりましょう。雄牛と話をすれば、悪い企みも包み隠しおおせはしないでしょ。」ライオンは行ってこいと命じました。

イフニラトは雄牛のもとにでかけ、陰鬱で悲しみに暮れた様子で彼の家に入っていました。雄牛は喜んで彼を出迎え、どうして来なかったのかとたずね、こう言いました。「どういう理由で、君はうちに来なかったんだい？」イフニラトは言いました。「自分の居場所をもたず、不公平で信頼に値しない主人に仕えるのはつまらないものだね。」雄牛はたずねました。「いったい何があったんだい？」イフニラトは言いました。「誰が運命から逃れられるというんだい。王様に仕えそのお側にあって、無事でいられる人がいると思うかい。ご主人様っていうのはね、たくさんの男といちゃつく、けがらわしい売春婦と同じようなものさ。あるいは、字を習いたての子どものようなものさ。出たり入ったり、お互いに張り合っ

て切りがないんだからなあ。

僕らのあいだに僕らの愛と友情があることを、君はほんとに知らないのかい。僕、君のことをライオンのところに連れてっちゃったんだから、君には借りがあるんだよ。だから、君のためを思って君のところへやってきたのさ。忠実で誠意のある奴が僕のところへやってきて、ライオンがこう言っているっていうんだ。『俺は雄牛の奴を食ってやる。奴は肥え太ってきたからな。』こんなことが耳に入ったから、君に用心するようにと忠告しようと思って君のところへやってきたのさ。」

雄牛はこんな言葉を聞くと、びっくり仰天して長いあいだ考えこんだあと、こう言いました。「ライオンや彼の貴顕たちに、僕がどんな悪いことをしたっていうんだい。なんで連中は僕の足を引っ張るようなことを考えたんだろう。王様のお側に仕える人たちが、僕のことを羨んで、嘘偽りをでっちあげて僕のことを讒言したんだな。人のことがすぐ羨ましくなる狡猾な連中は、善良な者たちについて善いことを言ったためしがないからね。」

すると、イフニラトは答えて言いました。「悪いのはね、ほかでもないライオンさ。奴は愛ってものを知らない。いつでもどこでも、手のつけようのない馬鹿野郎だ。はじめは甘く、そのあとで苦く、さ。」雄牛は言いました。「君の言うことは正しいよ。ライオンははじめは甘い味がしたけれど、いまは苦い毒の味がする。僕は草食動物なんだから、ライオンのような肉食獣といっしょにいるべきじゃあ、なかったんだ。欲張りだったばかりに、僕はこんな不幸にまきこまれちゃった。僕の苦しみは、あの愚かな蜂のようさ。はじめはスイレンの花に止まって気分がよかったので、そのまま留まりつづけて飛び去らなかつた。そのうち、花卉が迫ってきて押しつぶ

されてしまった。

小さいものに満足せず、原因と結果についてよく考えずに、たくさんものや遠くものを望む者は、あのハエと同じだね。奴らは花や木々のあいだを飛ぶことでは足りず、ゾウの耳のなかに飛びこんで窒息してしまうこともままあるからね。」イフニラトは言いました。「どうでもいいことにかかずらわるのはやめて、焦眉のことを考えようよ。死からどうやって逃れるか、方法を探そうよ。」雄牛は言いました。「僕は、ライオンの考えは正しいんだと思う。彼の側近が狡猾いだけなんだ。寄ってたかってライオンに疑いを吹きこんでいるのさ。あいつらに力なんてないさ。でも、悪知恵を結集すれば、罪のない者を破滅させることもできるんだ。オオカミとキツネとカラスの身に起こったようにね。」

こういう話がある。あるところに、ライオンが住んでいた。近くに道が通じていた。そこに、オオカミとキツネとカラスの三匹の動物が住んでいておたがいに仲良くしていた。ある商人たちがこの道を通る途中で、ラクダを残して立ち去ってしまった。ラクダはライオンのところにやってきて身の上話をした。ライオンはラクダに言った。『俺と一緒にいたいなら、俺と一緒にいていいぜ。おまえは生涯、陽気で満ち足りた平穏な生活を死ぬまで送ることができるぜ。』ラクダはそこに長いあいだ暮らした。

ある日、ライオンが狩りに出ると、ゾウと出会った。ライオンは戦いを挑んだけれど、打ち負かされ、負傷して傷だらけになり、血まみれになって戻ってきた。ライオンは病気に苦しんで横になった。狩りをするのはおろか、狩りに出かけることさえできなかつた。食べ物は払底し、彼の周りにいる者は食べる物が何もなかつた。ライオンはこのことを考えて彼らにこのように言った。『君たちは俺のところから立ち去りたいと思っているんだろう。』『私たちは自分のことなら何とかなるし、お腹もいっぱいです。心配しているのはむしろ、あなたのことです。私たちに何かあなたのお役に立てることがあったら、私たちは喜んでそれを行うのですが。』『君たちが心配していることは俺にはお見通しだよ。四方に散らばって、自分たちと俺の食べ物を見つけてきてくれないか。』

彼らはちょっと離れたところまで行くと、相談して言った。『俺たちと草食の異種族であるラクダとは何か共通点はあるのかな。もしもうまくいけば、ライオンがあつたラクダを食べるように仕向けてみたらどうだろう。』キツネは言いました。『俺たちはあからさまにこのことをライオンに提案することはできないな。ライオンはラクダと友愛を誓って交わっているからね。』すると、カラスが言った。『みんなはここにいてくれよ。俺に一人でライオンのところに行かせてくれよ。』そう言うと、カラスは出かけた。

ライオンはカラスを見ると、こう言った。『どうしておまえは来たのか。それとも、何か起こったのか。』カラスは答えた。『異種族であるラクダと付き合って何かいいことがあるんですか。もしもお望みなら、私たちの言うとおりにしてください。』ライオンは激怒して言った。『おお。何という厚かましさ、何という残酷さだ。俺がラクダと友好を誓い合って友愛で結びついていることを、おまえは知らないのか。おまえが俺にそんなことを言うのはじつにけしからんことだし、俺がそんなことをしたら道を踏み外してしまう。』すると、カラスは言った。『王様、あなたの判断は正しい。ですが、一人の人間は家全体のために犠牲になるものですし、一つの家は町全体のために、一つの町は国全体のために、一つの国は王のために犠牲をいとわれないものです。私たちはあなたのために苦しみ、食料がなくて悲しみに暮れています。ところが、私たちはあなたをこの災厄からお救いするために必要なものを何一つ見つけられないのです。』

こう言うと、カラスは友人たちのもとに帰り、彼らにライオンから聞いたこと、自分が彼に言ったことをすべて話した。彼らはこういうことを考えた。みんなが一緒にライオンのところに行って、それぞれが自分を食べてくれるようにと提案すると言うのだ。誰かが自分を食べてくださいと言うと、『おまえじゃだめだ』と誰かが答える。それで最後にはラクダに順番が回るという寸法さ。彼らはこういうことを考えて、ラクダを連れてライオンのところに行った。

まずカラスが言った。『私は、あなたが病に苦しみ、飢えのためにやつれているのを眼前にしております。私はあなたからたくさんのお恩恵を被りました。ですが、自分自身のこの身を除いて、あなたに差し出すものはありません。さあどうぞ、心配ご無用ですから私を食べてください。』すると、ほかの者たちが言った。『バカなことを言うではないよ。おまえは体も小さくて肉もまずいじゃないか。』キツネが言った。『おお王様。それでは、私なら今日のおいしいお食事になるでしょう。』すると、オオカミが言った。『やめろよ。おまえの身体は変な臭いがするから、食用には向かないぜ。それなら、俺が食べ物になってやるさ。その覚悟はあるし、喜んで食用になる。』カラスはキツネと声を合わせて答えた。『おまえの犬の肉を食べたことのない奴は、食べてみるがいいさ。そうすりゃ、必ず腹をこわすぜ。』すると、ラクダは、みながオオカミのことを拒んでいるのだと早合点して、こう言ったのさ。『みんなダメなんだね。僕はたくさん肉があるから、食べるときっとおいしいよ。』彼らは異口同音にこう言った。『ラクダの言うことはほんとうだ。』そして、み中はラクダに飛びかかって、一思いに彼を引き裂いたとさ。

というわけで、僕が恐れるのは、ライオンに奉公する

連中のために僕が損害をこうむることなんだ。ライオンが僕の破滅を願っていなかったとしても、お側に仕える者たちがライオンを唆(そそのか)すだろう。一滴の水も度重なれば岩をも貫く。だから、僕は連中と戦う覚悟でいるのさ。斎戒者も、慈悲深い者も、祈る者も、一瞬といえども自分を死から救い出した者ほど、有益で賞賛に値するものはないからね。』

イフニラトは言いました。「誰でも自分の身の安全を考えるものだけれど、はじめは策をめぐらせて、そのあと戦争になるものだね。賢い人は、敵を倒すまでは屈しないものさ。だから、僕の言うことをよく聞くんた。僕は君に役立つことを言ってあげるんだからね。自分の友だちの友愛に満ちた言葉に耳を貸さない奴はカメのような苦しみを味わうものさ。

こういう話さ。ある貯水池に二羽のハジロと一匹のカメが住んでいた。彼らは仲良く暮らしてたんだ。時間が経つうちに、その貯水池の水がなくなってしまった。ハジロは悲しんでその場所を去ろうとした。すると、カメは彼らに言った。『水がなくなったからと言って、あなたたちは痛くも痒くもないわよね。だって、自分の翼で飛んでいけば、必ず水のある場所が見つかるんですもの。たいへんなのは私よ。ほんとに不幸だわ。まったく私ときたら、どこに行ったらいいの。お願いだから、私のことも連れて行って、どこなりと好きな場所まで運んでくださいな。』『僕たちが君のことを運んでいるあいだ、君が一言もしゃべらないと約束してくれなけりゃ、君が僕たちと一緒にいくのはムリだな。』それでカメはハジロに道中誓ってしゃべらないと約束した。

ハジロはまっすぐの棒をもってきて、その棒のまんなかを咥えるようにカメに言った。カメが棒を咥えると、ハジロはその端をもってカメを宙にもちあげた。すると、偶然、人が空を見上げてハジロのあいだにカメがぶら下っているのを見て、驚いて言った。『ごらん。奇跡だ、徴だ。ほんとに、二羽のハジロにはさまれてカメが飛んでいるぞ。』カメがこれを聞いて、彼らの言葉に答えようとして口を開いた。で、結局、答えるために口を開いて、地面に落っこちちゃってバラバラになってしまったのさ。約束を守らない人はね、こういうことになるもんだよ。』

雄牛は言いました。「僕がライオンが破滅するように画策したとしても、恥知らずだということにはならないよね。」イフニラトは言いました。「僕の言うことを信じてね。たとえば、恐ろしい血走った眼つきとか、抑えがたい情念とか、尾を何度も叩きつけるとか、そういう兆候が見えたならば、ライオンは君に襲いかかろうとしているということさ。」

雄牛がライオンのところに行くと、ライオンがすっかり面変わりし、イフニラトが話した兆候が全部現われているのに気づくと、憤怒に囚われて言いました。「王の

ところにいるよりも、ヘビの巣にいるほうがまだ。」
このように言うと、ライオンと戦う構えをとりました。
ライオンはこれを見て雄牛と戦いました。

ステファニトはそこにいて、自分の友人のイフニラトを呼び出し、こう言いました。「君がしかけた企みを見るがいい。その結末を見るがいい。君はライオンに恥をかかせ、雄牛を殺してしまった。敵が無力であったとしても、平和裡に事を収めることができるならば、賢い王の顧問官は、王を戦場におもむかせないものだということを、君は知らないのかい。賢さは力の強い者たちをも打ち負かす。いま僕は君の傲慢さと貪欲さを見て、君が善をなすことができないとわかったよ。君のような人から助言を受けることが、支配者を破滅させるのであって、滅びを招くのは、ほかの何物でもないわけだ。言葉は知恵によって、理性は真実によって、施し物は柔和さによって、見た目の魅力は魂の美しさによって、富は困窮した人々への施しによって、命は健康と喜びによって飾られるものさ。賢者は知恵によって快活であり、愚か者は知恵の足りなさゆえに酔っぱらうことを、君は理解するがいいさ。

コウモリの目も同じような苦しみをなめているのさ。中身がなくて見えないから、夜に飛び回るのさ。そういう召使がいる王はみんな、水のきれいな美しい貯水池のようなものさ。深いところには、毒のある生き物たちが住んでいるから、どんなに渇きに苦しもうとも、水に近づく決心はできないのさ。君は、誰かが君より近く王に近寄ることを望まなかった。けれどね、王国はね、たくさんの人々から成り立っているものさ。海が多く波からできているようにね。だから、海は泳ぐ者にとって恐ろしげに見える。

誰かを愛しながら、近い者の破滅を望み、自分の利益ばかりを求めることは馬鹿げたことだよ。よき助言よりよきものは存在しないし、いやらしい事柄ほど有害なものはないのさ。だけど、こんなことを言い、君に説教を垂れている僕が、君にとって煩わしい者であることは知ってはいるさ。ある賢人は言った。愚か者のあら捜しをするな。その愚か者が君に憎しみをいだかないように。⁴

こういう話がある。凍えるくらい寒いころ、ある山に二匹のヒビが住んでいたんだが、そこでヒビは黄金の宝物を見つけた。ヒビは山から下りて穴を掘り、黄金を埋めてこういう申し合わせをした。『必要なだけ、黄金をとることにしようよ。残りは地中に隠しておこう。僕らが必要になったときに、それを使い尽くすまで、少しずつ取ることにしよう。』こんなふうには、彼らの友情は長いあいだつづいていたんだ。

お人よしのヒビは、狡いヒビを信じていたんだな。彼

らは黄金を木の下に、大きな樫の根元に黄金を埋めて隠し、それぞれの家に帰ったのさ。狡いヒビは何日かあとに、こっそり出かけて行って黄金を全部掘り返してしまっただ。しばらく経ってから、お人よしのヒビは狡いヒビに言ったんだ。『もしも君が同意するなら、行って土のなかにある僕らの黄金をいくらか取ってこようよ。』出かけて行って土を掘りかえしたけれど、何も見つからなかった。すると、狡いヒビが髪を掻きむしり、自分の胸を打ち、お人よしのヒビに宝物はおまえが盗んだんだろうと叫んだ。お人よしのヒビは何千回も誓って、そんなことはぜったいにやっていないと断言し、とどのつまりは、裁判官のところに行くことになったんだ。

裁判官は言った。『おまえがこの者を訴えるというのなら、証拠をもって来ることだ。』狡いヒビは言った。『樫の木が、しゃべりはしませんけれども、真実を証言してくれるでしょう。』狡いヒビは自分の父親のところに行って、すべてを話した。その樫の木には、洞があったので、父親にそのなかに入ってもらい、樫自体が話したかのように、お人よしのヒビが宝物を盗んだと声を出すようにと父親を言い含めた。彼の父親はこう言った。『俺はおまえの言うとおりにしよう。けれど、自分で自分の網に引っかからないように気をつけろよ。』

父親は出かけて樫のなかに隠れた。そして、裁判官がやってきて樫の木に向って質問すると、樫の木の中から宝物を盗んだのはお人よしのヒビのほうだという声が聞こえた。これを聞いて裁判官はそれが悪だくみだと気づき、樫の木に火をつけるように命じた。火が回り、煙が隠れている者を包み込むと、隠れていた父親はたちまち大きな叫び声をあげて、その場から引きずり出された。父親は悪事を白状し、息子とともに厳しい刑に処せられた。裁判官が命じたように、黄金は二人から取り上げられ、すべてがお人よしのヒビにわたった。

狡猾で狡賢い人間の末路はこんなものさ。僕はね、ヘビの毒牙のように君の舌を恐れていたんだ。『たとえ親戚でも親しい間柄でも、狡猾な人間から遠ざかるがよい。』こういうことを言った人はほんとうだね。君がやっていることは、あの商人の身に起こったことと同じさ。

こういう話がある。ある商人がある人から鉄を担保に百個の銀貨を借りた。商いから帰ると、担保を預けたその人のところに行き、こう言った。『あなたのところに預けた鉄を返してください。』その人は言った。『私はあなたの鉄を家の一角に穴を掘って隠しておいたんだが、ネズミがすっかり食べてしまったんだ。あんたはそれを惜しいと思わないでくれ。あんたはピンピンして帰ることができたんだから。今日うちに来て食事をしよう。それで、君の儲けを喜ぼうじゃないか。』彼は言うとおりに

⁴ 「箴言」9篇8節。

にしてその人のところで食事をとった。

食事が終わって家に帰るために外に出ると、鉄を預けたその人の息子に出会った。商人はその息子を自分の家に連れ帰り、納屋に隠した。家に帰ると、その人が自分の息子の消息をみんなに聞きまわっているのを見た。商人は言った。『あなたが息子さんの行方をお探しになっているのなら、私は驚が息子さんを空高く連れ去るのを見ましたよ。』その人は叫んで言った。『驚が人を宙に連れ去るなんてこと、見たことがあるか。』商人は言った。『もちろんですとも。ネズミが鉄を食うところでは、驚が人を宙に連れ去るんです。』その人は、何が起こったかがピンと来て、受け取っただけの鉄を返し、そのかわり、自分の息子を返してもらった。

君も同じことだよ、イフニラト。君は嘘偽りをつむいだことで、辱めを受けるだろう。愚か者は、愚か者という評判以外、何も得るものはないのさ。どれだけ蜂蜜を混ぜてみたところで苦い実は、苦さを甘みに変えることはできない。賢い人たちと付き合い、友情を結び、狡猾で愚かな人から遠ざかることは賞賛に値することさ。風が悪臭を捕えていたところに運び、悪い匂いを伝染させてしまうように、邪悪な人間と付き合いっていると、彼らから悪臭が移ってしまうもんだよ。こんな説教を垂れて、またしても君は僕を煩わしいと思っているようだ。愚か者どもが賢い人たちを、無学な者が学のある者を、汚らしい者が汚らしくない者を、墮落した者がよい人間を憎むのはいつものことさ。」

彼らがこんなことを話しているうちに、ライオンは雄牛を殺してしまいました。そのあとで、ライオンは自分が雄牛を殺してしまったことを後悔しました。イフニラトはライオンのところに行き、彼が悲しみに沈んでいるのを見ると、こう言いました。「どうして陛下は雄牛のことで後悔しているのですか。ヘビが指を噛んだときは、毒が身体全部に回って死なないように、指を切り離すものです。身体全部と比べれば、指なんて惜しくないでしょう。」

というわけで、愚かで狡猾な人間が、友情と愛で結ばれていた友人たちのあいだに入って、愛を敵意に、平安を戦乱に変えてしまう話を、賢者は王にしました。王は賢者に言いました。「雄牛を殺したあと、イフニラトがどうなったかを聞かせてほしい。」賢者はこれ聞いて言いました。

雄牛が殺されたあと、レオパルドがやってきました。レオパルドはライオンの教師であり、忠実な顧問官でした。彼はイフニラトのいる門にやってきて、雄牛に起こったことで、ステファニトがイフニラトを非難し責めているのを聞きました。ステファニトはイフニラトにちょうどうこう言っていました。「ライオンがこういうこと全

部を聞いたら、君だってライオンの制裁を免れないよ。」レオパルドは事の真相が全部わかり、ライオンの母親のところに行って、聞いたことを全部話しました。

朝が来ると、ライオンの母親は自分の息子のもとに行っていていました。彼女は、雄牛を殺してしまったことを後悔して、ライオンが悲しみに打ち沈んでいる様子であるのを見ると、彼に言いました。「おお、子よ。後悔し、悲しんでいても、身体を衰弱させ、気分を暗くするだけです。さあ、元気を出して悲しむのをやめなさい。おまえが何も言わなくても、おまえが罪もないのに殺してしまった雄牛のために悲しみ、苦しんでいるのは、私にはわかりますよ。もしもおまえが公平な王であったならば、雄牛のことをきちんと考えなくてはならなかったのです。お互いに心を通わせなければならないと言われていたのではありませんか。おまえが雄牛にどう振る舞ったのか、聞かせてくれませんか。」

ライオンは言いました。「雄牛は僕にはいつも友好的だった。あらゆる点で、雄牛は僕のことを信頼してくれた。いろいろとアドバイスをくれたけれど、彼のアドバイスに従って悪いことは何も起こらなかった。僕はいまはまだ後悔する気もちから逃れられないし、雄牛の死を悼んでいる。だって、雄牛は僕のまえで何も悪くないんだもの。僕は狡猾なイフニラトの偽りの言葉にまんまとだまされてしまったんだ。」

ライオンの母親は言いました。「私が信頼できる人から聞いたことですが、イフニラトは羨望の気もちからおまえに誹謗中傷をおこなったというではありませんか。」ライオンは言いました。「それを言ったのは誰ですか。」母親は言った。「自分の友人の秘密は守らなくてはいけません。秘密を守れない人は自分の良心を辱め、自分に寄せられる信頼を裏切ってしまうのですよ。」ライオンは言いました。「ほかのケースならばそれを秘密にしておくことも必要でしょう。でも、いったん言葉にしてしまったなら、真実が明らかにならなければいけない。被害を受けた人たちのために復讐することで、過失を隠さなくてはならないのです。公平な王は、中傷によって刑罰を下してはならないし、告げ口で抑圧をしてはなりません。それは真実と真理のためにおこなわなくてはならない。雄牛のことを後悔しているように、イフニラトのことを後悔するようになるのではないかと、私は恐れているのです。」ライオンの母親は言いました。「おまえが私の言葉を疑っていると、私は思いません。」ライオンは言いました。「僕はお母さんの言葉を疑ってはいないけれど、真実を明るみに出そうとは思っている。」ライオンの母親は言いました。「おまえがそれをやるなら、私は良心のない人間になってしまいやしないか、それが心配なんです。」

自分の母親からこれを聞くと、ライオンは自らのすべ

での側近たちを呼び集めました。イフニラトも呼ばれました。イフニラトは、ライオンが物思いに沈んでいるのを見ると、ライオンの周りにいる者たちに向かってこう言いました。「私の見るところ、ライオンは悲嘆と後悔に暮れているようですね。」ライオンの母親が答えてこう言いました。「ライオンが悲しんでいるのは、ほかでもない、今の今までおまえを生かしたままでいたためなんだよ。おまえは狡猾に立ち回ってあの不幸な雄牛を殺してしまったんだからね。」

イフニラトは言いました。「ご存じのとおり、善を行おうとする者はみな、悪に耐える覚悟をしなくてはなりません。このゆえに砂漠で修業する者は、人々と一緒にいることを拒絶し、砂漠を好んだのです。たしかに私はライオンの友人として雄牛のことをライオンに報告しました。火打石のなかに隠れている炎は、鉄によって引きだされます。同様に、犯罪というものは追求されればされるほど、明るみに出ますし、明るみに出れば出るほど、全貌がはっきりしてくるという次第です。もし私が、自分が犯罪をしたと思っているならば、ここにはいず、どこか隠れた場所にいるでしょう。私が国王陛下に望むのは、私にかんするあらゆることを注意深く審理することです。ご自身がなさってもいいですし、真実を嘘に変えてしまうことがないような、公平に真実を追及できるほかの者に事を託してもかまいません。

えこひいきなく裁いてください。私を羨む者らの言うことを聞かないでください。王が私にいただく愛のゆえに、私に歯向かい憎悪する讒言者たちはおびただしい数にのぼるのです。私にかんしてこれをしてくださらなかったなら、私には誰も頼る者がおりません。私がすがるのは、心と腹を試される神の慈愛のみです。そのうえ私は死を恐れてはおりません。誰でも死を免れることはできないからです。私に何千という命があったとしても、王に好かれるためには、それらを惜しまないでしょう。」

王の貴顕の一人が答えてこう言いました。「王の愛や自らの務めを論じることは許さぬ。おまえが何について法を犯したかを述べるがいい。」

イフニラトは答えました。「物わかりの悪い人よ、生きている人間にとって命ほど大切なものはないということがわからないのか。もしも私が自分のために答えなければ、誰が私のために答える労をとってくれるのか。」

私は、おまえのなかに秘められた羨望を、衆目のまえに明らかにした。おまえが敵意に溢れ、おまえの信仰がかんたんに揺らぐことも明らかになった。王のお側に仕えるのはやめたほうがいい。おまえのように羨望に打ち負かされやすい者は、王のお側に仕えるのはふさわしく

ない。」この者はこれを聞いて打ちのめされてその場を立ち去りました。

ライオンの母親はイフニラトに言いました。「イフニラトよ、私はおまえが性も凝りもないことにあきれています。おまえはよくこれほどの無法をおこない、そんな恥知らずな言葉を私たちに言うたものですね。」イフニラトは答えて言いました。「どうしてあなたは片方の目だけで私を見ているのですか。生まれ落ちてから自分に二つの目があることを、あなたはお存じないのですか。預言者によれば、『誰もかれも背き去った。皆ともに穢れている。』⁵ 真実と真理を愛する者は一人もいない。王はかぎりない自らの善良さで私を糾弾せず、私を脅かすことがないのです。」

ライオンの母親は言いました。「この狡猾で不誠実な者を見るがよい。この者はこれほどの無法をおこない、大いなる犯罪をした挙句に、真実を歪め、自らの狡猾な言葉で私たちを誑かそうとしている。」イフニラトは言いました。「女が男の仕事に口を出すこと、男が女の仕事に口を出すことはよくないことです。女が支配する家とその男は不幸です。聞かれもしないのに王に答える者は、分別がありません。悪をなす者は、誰にたいしても友情をもつことがなく、将来の悪から身を守ることができません。」

ライオンの母親は言いました。「不誠実なる者よ、どんなに言葉をつむいでも、おまえが裁きの苦しみを免れることができるとは思わぬがよい。」イフニラトは言いました。「真実からはなれて中傷をおこなう者は、言葉も行いもころころ変わるものです。」ライオンの母親は、ライオンがこれらすべてについて何も言わぬのを見てこう言いました。「王のまえで厚かましくもイフニラトが饒舌になり、それを誰も止める者がいないときに、イフニラトがほんとうのことを言っていると言っていた者たちが、実は嘘をついていたのです。」

そのとき、王は審理がはじまるまでイフニラトを牢屋に投獄し、枷をはめておくように命じました。イフニラトに枷がはめられたとき、ライオンの母親は、レオパルドが自分にすべてを話してくれたと打ち明けました。ライオンは言いました。「奴に手を触れるな。どんな苦しみを受けるかはそのうちわかるだろう。」

夜になると、ステファニトがイフニラトのもとに来て枷を見ると、泣きだして言いました。「僕がまえから警告していたことが起こっちゃったじゃないか。君は僕の言ったことを聞かなかった。傲慢と自分への過信が君を打ち負かしてしまったのさ。何が起こったか、よくよく肝に銘じるがいい。」すると、イフニラトは言いました。「君の言ったことはほんとうだったよ。この不幸な僕は、

⁵ 『詩篇』14章3節。

貪欲さに囚われていたんだ。僕に起こったことは、あの病人に起こったことと同じさ。自分は食べ物を何も食べてはいけなくて知っていたんだが、ちょっと味見をしてみたいと思って一口食べたら、身体の調子を悪くしてしまった。いま僕が恐れているのはね、自分のことだけじゃなくて、君のことなんだ。僕たちのあいだにあった友情と愛ゆえに、君も捕まるんじゃないかってね。君が僕にかかわることを好むと好まざるにかかわらずしゃべってしまって、僕ら二人に死を引き寄せてしまうかもしれない。」

ステファニトは言いました。「僕だってそう思うさ。だけど、僕は、自分が犯罪をしたことを君が認めたほうがいいと思う。来世で罰を受けるより、この世で罰を受けたほうがいいよ。」イフニラトは言いました。「何が起こるのか、僕は見届けたいと思う。」ステファニトは、悲しみと恐怖のなかで立ち去り、毒をあおって死んでしまいました。

翌朝、ライオンは裁判官とレオパルドとイフニラトを呼んで、裁判を催しました。彼らがみな集まると、レオパルドが言いました。「おお、兵士たちよ、友人たちよ。我らの王はいつも、雄牛を殺してしまったこと、イフニラトが邪悪な助言をしたことを考えている。王は実にこう仰せだ。『もしも誰かがこの件について何か知っているなら、申してみよ』と。王は裁き抜きで刑に処したいとはお思いになっておられぬ。」

そして、裁判官が言いました。「本件について何か知る者があれば、申し述べるがよい。もしも邪悪な人間が殺されるなら、その邪悪な人間とともに悪が滅びるだろう。ほかの者たちは有益な教訓を引き出すであろう。」そして、イフニラトは言った。「なぜ黙っているのだ。私について何か知っている者がいたら、言うがよい。私が答えてやろう。もしも誰も何も知らないどころか、嘘までつくならば、あの藪医者のように苦しむことになるだろう。」

ある町に一人の医者 came そうだ。そこへ、町の領主の娘が病気になるという事態が出来た。賢いが盲である、ある医者が、この娘を薬草で治療するように命じた。そのとき、外国から来た医者が呼ばれ、盲の医者が言った草がどんなものであるかと質問された。この医者は無知だったので別のよく似た草を準備し、病人に飲ませた。病人はそれを飲み、お腹の病を発症して死んでしまった。病人の両親はこの薬と草をくだんの医者に飲ませた。医者はそれを飲み、死んだ。わかりもしないことに口を出したり、余計なことをしたりする者は、こういうことになるのだ。」

そのとき、料理長が立ち上がって言いました。「友人たちよ、私の意見を聞いてほしい。私にはイフニラトが嘘つきで狡猾のように思えます。よく人が言うことですが、

誰かの左目が小さく濁っていて眉が吊り上がり、歩いているときに頭が下がっているなら、その人間は讒言者であり狡猾です。この不幸な男を見てみましょう。そのとおりではありませんか。」イフニラトは言った。「私たちはみな空の下にいます。誰一人として、空の上に昇ることのできる者はおりません。そんなことを言う人間は、自分が賢いと考えているわけですが、自分が愚か者であることを露呈してしまっています。おまえは自分の目のなかにある丸太に気づかないのに、隣にいる者の目にあるおが屑に気づくのか。⁶それなら、あの愚かな女に起こったことと同じことがおまえの身に起こったことになるな。」

こういう話がある。二人の女と一人の男が虜囚の身から逃げ出し、裸のまま歩いていた。一人の女が端切れか何かを見つけて恥部を隠した。もう一人の女が彼女に向って言った。『あなたは裸でいて恥ずかしくないの?』男はその女に言った。『バカな女だ。おまえは自分が裸でいることがわからないのか。それなのに、人の裸を馬鹿にしている。』料理長さん、おまえはそんな具合だよ。おまえは悪臭のするかさぶただけなのに気づかず、王のおまえに立って手で王様の食事に触ろうというんだからなあ。』

これを聞いて料理長は思ったことを口に出してしまったことを後悔し、泣きだしてしまいました。ところが、ライオンは誰かの入れ知恵か、この料理長について言われたことに幾分の真実があると思い、料理長を自分のそばから追い出してしまいました。その裁判のことは文書に記されましたが、一方のイフニラトはふたたび牢屋に入れられました。

イフニラトの友だちのある者が牢獄にいる彼のもとを訪れて、ステファニトが死んだことを伝えました。すると、イフニラトは号泣しはじめ、こう言いました。「今となっては、僕はもう命なんかいらぬ。だって、誠実な大好きな友だちを失ってしまったんだから。辛いときに不幸がたび重なって起こるといのはほんとうだな。」

そのあと、イフニラトは裁判の場へと引立てられていきました。彼を見て軍司令官が言いました。「イフニラト、おまえが何をしでかしたか、俺は知っているぞ。そのどれ一つをとってみても、隠しおおすことはできない。汲み尽くすことができない偉大な王の慈悲がなければ、おまえがいまこのときまで生き残ることはできなかっただろう。」イフニラトは言いました。「王の慈愛は汲み尽くすことができないが、おまえの心は悪どく残酷だ。私はおまえが望んでいること、企んでいることがわかっている。判決が出るまえに、私を死に至らしめようというのだろう。私はそのことでおまえを責めようとは

⁶ 『マタイによる福音書』3章3節; 『ルカによる福音書』6章41節。

思わない。というのは、狡猾で邪悪な者どもはいつも善良な者たちと戦い、彼らを憎んでいるのだから。」

裁判官は言った。「身分の高い者は真実を言うのがふさわしい。悪を暴き、ものの道理がわからない者たちを教え諭さなくてはいけない。イフニラト、私はおまえに諭したいのだが、来世ではなく、この世で刑を受けたほうがよい。私たちみんなに真実を打ち明けるがよい。」すると、イフニラトは言いました。「おまえの言ったことは正しい。賢い人間というのは、束の間過ぎ去ることから永遠のものを選びださなくてはならない。けれども、この犯罪のなかで私は悪くはない。だから、私の血が流されたとしても、私はそのことでおまえたちの共謀者となるつもりはない。誰かが嘘をついたなら、その人間を嫌悪すべきであり、その人間が愚かなのだ。自分にたいして嘘をつくとしたら、なおさらそうではないか。私にどんな名誉がついてくるというのか。見るがいい。何も得る物がなくて、どうして後悔しないわけがある。嘘の証言者となって悔しい思いをすることがないよう、気をつけるがよい。」

こういう話がある。ある鷹狩り庁の長官が、自分の君主の妻に自分と寝てほしいと望むようになった。女は男を相手にしなかった。このことで鷹狩り庁長官は腹を立てて、二羽のカケスを捕まえ、一羽のほうにはペルシア語で「私は女主人さまが淫夫と一緒にいるのを見た」と言わせ、もう一羽には「何も話しちゃだめ」と言うように教えこんだ。

ある日、たまたま君主のところにペルシア人が来て昼食をとった。彼らはカケスがペルシア語を使って話ができるのを聞いて二羽をことのほか気に入った。このペルシア人たちは、カケスが話す言葉の意味も教えた。鷹狩り庁の長官は外にいてこう言った。『私もそれを見たことを証言します。』君主は怒り狂って自分の妻を殺そうとした。そのとき、彼女は自分の夫に、鷹狩り庁の長官についての事の顛末を語ってこう言った。『この人は、私に罍をしかけたのです。なぜなら、私は愚かな行いに同意しませんでしたので。この鷹狩り庁の長官が教えた言葉以外に、カケスはペルシア語で何も話せません。』ペルシア人たちはカケスに別の言葉を話しかけてみたが、カケスはこの狡猾で偽りに満ちた言葉以外、何も話せないことが判明した。

女主人は鷹狩り庁の長官のもとに来て言った。『私を陥れてそんな証言をするなんて、おまえはほんとうに神を畏れてはいないの？ほんとうにそのとおりであったの？』この者は言った。『ほんとうにそのとおりであった。』彼がそう言い終えるや否や、突然鷹が彼に向かって飛んできて、彼の両眼を抉りだした。もしも私について偽りの証言をしたら、おまえも同じように自分の友人たちとともに苦しむだろう。』

それ以上、誰もイフニラトの悪を暴くことができなかつたので、イフニラトは七日間牢獄に閉じこめられた。ライオンの母はライオンに言った。「もしもおまえが何のお咎めもなしでこの詐欺師を解放したなら、よく覚えておいで、おまえの配下にいるすべての者たちが何を恐れることもなく、やりたい放題のことをするでしょう。なぜなら、邪悪なことをおこなっても何の罰もないことが衆目に明らかになってしまうからです。」自らの母親がしつこかったのでライオンも折れ、イフニラトを殺すように命じました。

そして、最後に賢者は言いました。「自分の近い者に罍をしかける者は、自分が掘った溝に落ちることをよくよく理解し、肝に銘じるがよろしいでしょう。」

第三の例え話。イフニラト殺害のあとの王の問い

そして、王は言った。「私はおまえの例え話を理解した。今度は、たがいに愛し合い、いつも友愛のなかにいる友人たちの例え話をしてくれないか。」賢者は答えて言った。

この世のありとあらゆるもののなかで、誠実な友ほど大切な者はありません。これをもっとつまびらかに述べたいと思います。こういう話があります。ある町に狩りにふさわしい場所がありました。この場所には、洞のある背の高い樫の木が立っていて、そこにカラスが巣をつくっていました。ある日、カラスはとても残忍な狩人が肩に網を担ぎ、手に棒をもっているのを見ました。カラスは狩人を見ると、驚き、心ひそかに巣のあるその樫の木に留まり、狩人が何をするのかを見届けてやろうと考えました。

狩人は網を広げてそこに小麦の粒をばらまきました。一羽のハトがいました。そのハトはほかの者より年かさでしたが、小麦の粒を見て、網には気がつくことがなく、ほかのハトたちとともに網にかかってしまいました。これを見て、狩人は大いに喜びました。ハトたちは網のなかでバタバタともがきはじめました。年かさのハトは言いました。「恐れることはない。みんなたがいに力を合わせて、自分の翼で網をもちあげようではないか。」彼らはそのようにして網を宙にもちあげました。

狩人はこれを見てびっくり仰天しましたが、彼らをそのままにしておかず、彼らのあとを追って、長いあいだ飛ぶことはできまいと考えました。カラスはこれをじっと観察していました。年かさのハトは、狩人が彼らのあとをつけてくるのを見ると、ほかのハトたちに言いました。「狩人が俺たちのあとをついてくるぞ。我々が平原のうえを飛ぶなら、彼は我々の追跡をやめないだろう。我々が山や歩きづらい場所のうえを飛ぶならば、狩人はたちまち我々から後れをとるだろう。この道を行けば、俺の友だちのネズミがいる。彼のところまでたどり着ければ、ネズミはたちどころに網を食い破って私たちを自

由の身にしてくれるだろう。」狩人は企みに気づいて動転し、もと来た道を帰りました。

カラスは彼らのあとを追っかけていきました。彼らがどう助かるかを見届けたかったし、何よりも彼らにたいして友好的なネズミのを見てみたかったからです。かくして彼らはネズミの巣にたどり着き、地面に降りました。ネズミが出てくるとハトを見て、嬉しそうに彼を迎え入れると、こう言いました。「友人よ、誰がおまえをこんなふうに網で縛りあげたんだい。」ハトは答えました。「運命が俺をこんな残酷な網で縛りあげたのさ。俺は目がくらんじまってね。小麦の粒にまっしぐらに飛びついたら、網にかかってしまったのさ。俺がこんな災難に遭ったことはまあそんなに驚くべきことではないね。俺よりけっこうましな奴らでも、もっとひどい目に遭うことがあるからね。太陽だって月に食われて消えてしまうことがあるし、月は地の影に覆われることもある。海の魚は海の底から誘き出されることもあるし、空の鳥は空中で捕われることもある。それが定めとあってはね。」

ハトがこう言うと、ネズミはハトを縛りつけていた網を噛みちぎろうとしました。ハトは言いました。「まずはじめに俺の配下の奴らを助けてやってくれよ。俺の縛りを解くのは、そのあとでいいさ。」ところが、ネズミはみんなを解放するのはいやだ、縛めを解くのは自分の友人だけだと言いました。ハトがどんなに一生懸命説得しようとしても、ネズミは彼の言うことを聞き入れませんでした。ハトはネズミに言いました。「なあ、ネズミ君、俺が君を差しおいて奴らに気を遣ったからと言って、俺のことを怒らないでくれよ。神様が俺にこのハトの連中にたいする権力をあたえてくださった以上、俺は好むと好まざるとにかかわらず、連中の面倒を見なきゃならないんだ。連中は信頼と友情をもって俺に仕えてくれているし、奴らの助けと協力があったからこそ、神は我々を狩人の網から助けてくださったのだ。俺が頼みたいのは、最初に俺を助けてくれるのは大いにけっこうなんだが、奴らのこともきちんと面倒を見てくれるってことなんだ。奴らの誰かが網に捕まったままではいるよりも、俺だけが網に捕まったままではいるほうがいい。」

すると、ネズミは言いました。「おまえの配下にいる者たちは、おまえのことが大好きでおまえを信頼していると言っているよ。」これを言うと、彼はみんなを網から解き放ってやりました。彼らは自由の身になって飛び去って行きました。

カラスはこれを見ると、ネズミの巣に降りていって、ネズミを呼び出しました。ネズミは言いました。「おまえは誰だい、友だちよ。」カラスは答えました。「俺はカラスだ。俺はおまえが友人たちに抱いていた優しい気もちの大体のところを見てきた。だから、俺もおまえと友だちになりたいと思っている。このために、俺はおまえ

のところに来たんだ。」すると、ネズミは言いました。「僕と君の共通点は何かな？賢い連中はね、強い奴と近づきになり、弱い奴を蔑(さげす)むことが必要なんだ。こういうことをはじめてしまったら、水のうえで荷車を引っ張り、陸のうえで船を曳くようなものさ。君の餌になることがわかっていたうえで、どうして僕が君の友だちになれるかい？」

「おまえにとって何がためになるかを、よくよく考えてみるがいいさ。おまえを食べたって俺にとって何の得もないだろう。そのかわり、おまえが生きて俺のことを助けてくれれば、俺にとって都合がいいじゃないか。俺が楽しみにしているのに、俺を満足させずに放っておくというようなことは感心しないな。おまえがおまえの友人にたいして抱いた友愛については、俺はとくと拝見したんだ。それはおまえ自身が俺に示してくれたとおりにんだから。賢い人間の善行というのは、ギリシア語で『ムスクス』という雄牛の芳香によく似ている。それは見えないけれども、それ自体から香りを出すものだよ。」

ネズミは言いました。「生まれつき備わった敵意というものはどうしたって免れることはできない。ライオンがゾウと敵対するのはいつものことだし、それはネズミとネコでも同じさ。敵を信じてはいけなないんだ。水は、炎によって熱せられても、性質を変えないものさ。どんなに熱くたって、炎にかければ炎を消すものさ。」

カラスは言いました。「おまえが言おうとしていることは、俺だってわかるさ。だけどな、俺の愛はそんなもんじゃあないんだ。俺たちのあいだにできる友愛は、堅固で期待に溢れるものになるだろう。金の器は鑄型に入れて鑄造するのは容易じゃないが、かんたんには壊れない。粘土の器はかんたんに造れるが、かんたんに壊れてしまう。ほんとうの愛というのはこういうものさ。愛が生まれるのはかんたんじゃあないが、一度それが生まれると壊れることはない。汚らしいにせものの愛は瞬く間にかんたんに生まれるけれど、瞬く間に壊れてしまうものさ。」

ネズミは答えて言った。「僕は君の愛を受け入れるさ。僕は求めて来る者の誰一人として、満足させなかったことはないんだ。君が誠実でなくなってもしかたがない。それでも僕は君の言葉を信じている。だって、『バカなネズミを見つけてな、だまくらかして食ってやったぜ』と君が言うなら、それは君にとっては自慢だろうけれど、それで君が尊敬されることはないからね。」そういうとネズミは自分の巣から姿を見せましたが、全身ではありませんでした。

すると、カラスは言いました。「この世で生きる者には、二通りある。教えに従って生きるのを好む者と、身体の欲求のために生きる者だ。彼らは、鳥をだまくらかすために小麦をばらまく獲り手に似ている。獲り手は小鳥の

ために小麦の粒をまくのではなく、自分のためにやっているのだ。」「僕が君と友愛を結んだのは、君が望んだからにほかならない。だから、僕が君のところに出ていくことを妨げるのは、僕が君と同じようなカラスが怖いからだというだけさ。だって、奴らは、外見は君にそっくりで、気もちは君と違うからね。」

すると、カラスは言いました。「連中のために、僕を怖がらないでくれ。愛がほんとうであることを証明するのは、愛する者たちを愛し、敵たちと敵対することだけだよ。だからね、僕が君のことを愛する以上、僕の友だちだって君を愛するはずさ。」カラスがこう言うと、ネズミは自分の巣から出てきました。こうして二人のあいだで友情がたしかなものとなったのです。

ある日、カラスはネズミに言いました。「おまえの家は、道のそばにあるよな。だから、俺がいるおかげで、おまえが誰かに見つかってしまっておまえが死んでしまうんじゃないかと心配なんだ。俺は魚やほかの食べ物がたくさんあって、人間も近くにいない場所を知ってるんだ。俺の友だちのカメがそこに住んでいる。おまえがそこで飯を食い、俺たちと暮らすために来てくれればいいなあと思ってる。」ネズミは言った。「僕は君といっしょにくよ。僕はね、ある理由のためにここに暮らすのはあまり好きじゃないんだ。僕たちがその場所に着いたら、その理由を話すことにするね。」

カラスはネズミの尻尾を咥えてカメが住んでいる泉へと連れていきました。カメは、カラスがネズミを連れてくるのを見ると、それがよそ者の誰かであることに気づき、用心深く水のなかに隠れてしまいました。カラスはネズミを地べたに置き、カメの名前を呼びました。カメはカラスの声だとわかって、カラスのもとに出てきて「どこから来たの」とたずねました。彼は起こったことを話しました。

カラスはネズミに言いました。「俺たちがここに着いたら、何か自分のことを俺に話してくれると、おまえは俺に約束したよな。」ネズミは言いました。「僕はある修道士のところにて、食べ物になるものをたっぷり手に入れて暮らしてたんだ。お腹いっぱいになるといろいろなかけらを集めてほかのネズミにあげたものさ。僕を探し出そうと修道士が家探しをしたことは一度や二度ではないけれど、その修道士はとうとう僕を見つけられなかった。ときどき僕の襲撃から免れるように自分の食べ物を宙づりにしてみたけれど、それでも無益だったさ。」

ある日、旅の修道士がやってきた。修道士たちはおしゃべりをしていましたが、僕らを驚かすためにパーンと手を打った。お客にきた修道士は、どうして彼らが手を打ち合わせるのか、その理由を訊いた。その修道士は答え

た。「私たちが手を打ち鳴らすのはネズミのためですよ。ここには、恥知らずで向こう見ずなネズミがいて、私たちに損害をもたらすんです。あなたにお願いしたいのですが、どうか巣への入り口を探し出して、奴の住処を掘り崩してやりましょう。」僕はそのとき自分の巣にいたんだけど、この言葉を聞くと、そこから逃げだし、別の穴に籠ったんだ。

僕の巣には金の延べ板があつてね、僕はそれを敷いて寝ていたんだ。それは僕のご自慢だった。修道士たちは地面を掘り進んで、僕の巣と金を見つけた。彼はうれしそうに黄金を見つけてこう言った。「この黄金がネズミの元気のもとだったんだな。それで私たちに被害をあたえていたんだ。となれば、奴も今やオドオドしておとなしく、静かになるだろう。」⁷修道士たちがそう言ったときから、力が僕から去り、すばしこさもなくなり、ほかのネズミたちも僕を馬鹿にしはじめた。翌日、修道士の食糧庫に入りこもうとしたが、できなかった。これを見ると、ほかのネズミたちは僕を槍玉にあげて僕の敵になったんだ。

友だちや親戚が集まってきたのもあの黄金のためだったとわかって僕は驚いた。善い思案も賢さも黄金があつてのものだからね。富をもっていない者はいつも悲しみに沈んで、みんなには唾を吐きかけたくなるような、愚かで役立たずな者にみえるものさ。もしも乞食で貧しい人間が勇敢な振る舞いをすると、金持ちはそいつを頭の悪い乱暴者と言うし、また、柔和で穏やかであると無力な奴だと呼ぶし、話が上手だと女たらしと言うし、あまり話をしないと頭が足りないと呼ぶんだ。恥ずかしい行いの証人となるよりも、早いところこの人生とおさらばしたほうがましだね。

そんなことを考えながら、僕は来訪者の修道士が黄金を分けて、自分の取り分を小さな袋に詰めて自分の枕元に入れて隠すのを見たんだ。そこで僕はこっそりその黄金を引っ張りだそうと思ったわけだ。奴が寝てると思ったからね。だけど、奴は目を覚ますと、手探りで細枝を自分のほうに引き寄せ、それを手でつかむと、僕の頭目がけて一撃を加えた。僕は恐ろしい苦しみを味わいながら、自分の巣穴に戻ったというわけさ。そのあと、僕は黄金の入った袋を噛みちぎったけれども、この修道士は僕を見ると、ふたたび力任せに同じ細枝で力いっぱい僕を引っばたいたんで、僕の鼻からはたちまち血が流れ出した。すんでのところであの穴に戻ることができたのでよかったものの、かなりヤバかったんだ。僕は長いあいだ声を立てることもできずにそこに寝ていた。そういうわけで、僕は黄金のことを考えることも、耳にすることもいやなくらい黄金のことを憎んでいるんだ。

⁷ この部分には明らかに、金に魔術的な力があると信じた東洋（インド）の俗信の痕跡があると考えられる。そうでなければ、金を失ってなぜネズミが無力になるのかの説明がつかない。

貪欲な魂は、あらゆる悪いことの根源だと理解したのさ。貪欲な者は、この地上においても海においても、黄金から救われることはない。僕の見るところ、必要最小限のものくらい、善いものはないね。これが僕が生き方を変えて、隠遁者の生活を送るようになった理由さ。僕がカラスさんと交情を結ぶまえには、僕の大好きな友だちのハトさんがいた。この世で、友情のこもった話くらい素晴らしいものはないね。苦い経験から僕は知ったんだけど、賢い人っていうのはね、ほんとうに必要なもの以上を望んではいけないんだよ。一番必要なものっていうのは何か？それはパンと水だよ。誰かが全世界の支配者だとしてもそいつは、災難から免れて自分の人生を送っている、ごくちっぽけな人間にはかなわないんだ。

僕は心ひそかにそう考えて、カラス君、君のあとをついてきたんだよ。そしたら、カメさん、たまさかあなたと友だちになったというわけさ。」

カメは答えてこう言いました。「私、わかるわ。あなたはすべてを上手に賢くお話して下さったんですもの。それに、あなたが遭った災難の大本は何かについて、あなたがしじゅう考えをめぐらせていらっしゃることもわかります。そのために、あなたは言葉が行いを飾るということを知らなければならないのよ。それは、病気の者が薬草を探し当てることができなければ、知識もその者にとっては意味がないということと同じです。だって、知識が病気を楽にしてくれるということはないんですもの。」

富のためにあくせくしてはダメ。賢い方というのは、富がなくても敬われるものですわ。だって、ライオンというのは、眠っていたってやっぱり怖いでしょう。ですから、バカな金持ちが尊敬に値しないというもおんなじこと。異郷での自分の生活について思いをめぐらせてもダメ。賢い方のあいだでは、他郷の出身かどうかなんて意味がありませんもの。過去のことを思い出してもダメ。昔はたいそう立派だったけど今は落ちぶれてる、なんて言うのもダメ。この世にあるものはみんな、朽ち果て移ろいゆくものよ。雲の影、愚か者の友情、女の愛、嘘のお追従、富、そんなものは一番望みを置いてはいけないものなの。賢い方って、富が増し加わったとしても喜ばないし、それが減ったとしても悲しまないものよ。」

カラスはカメの演説を聞くと、大いに喜んでこう言いました。「友人に助けてもらうこと、喜びを分かち合うこと、このこと以上に素晴らしいことは人生にありはしないさ。賢者を助けることができるのは、賢者だけさ。倒れたゾウを助け起こすことができるのは、ゾウだけだということと同じようにね。」

カラスがこんなことと、これと似たようなことを言っていると、シャモアが出てきました。シャモアを見ると、カラスは樹上に舞いあがり、カメは水のなかに潜り、ネ

ズミは穴のなかに隠れました。シャモアは少しばかり水を飲むと、驚きのあまり立ち上がり、あっちを見たりこっちを見たりしていました。

カラスはもっと高くに舞いあがって、シャモアを別の動物が追ってきていないかをたしかめました。四方を見わたしてから、カラスは地上に降り、カメとネズミを呼んでシャモアについて話しはじめました。カメは、シャモアが水を飲むのを怖がっていることに気がついて言いました。「かわいい子、お飲みになったらどう。誰もこちらに来てはいないわよ。あなたがどこからいらしたか、お話ししてくださいませんか？」シャモアは言いました。「今まで狩人たちが私のあとを追っかけてきていたわ。私はあちらに逃げ、こちらに逃げしながら、ここにたどり着いたっていうわけ。」すると、カメは言いました。「かわいい子、恐れることはないわ。私たちと一緒に暮らしましょうよ。狩人がここに来たことはいままで一度もない。あなたのまえにはたくさんの食べ物と、きれいな水があるわ。」シャモアは彼らとともに暮らしたいと思いました。彼らは毎日、樫の木のところに集まり、お話をしました。

そんなある日のこと、カラスとカメとネズミがいつものようにお話をするために集まってシャモアが来るのを待っていました。待っても、待ってもシャモアが来ないので、シャモアが狩人の仕掛けた網にかかってしまったのだという結論になりました。カラスは高く舞いあがって狩人の仕掛けた網にからめとられたシャモアを見つけました。カラスは戻って自分の友人たちに見たままを言いました。カメはネズミに言いました。「ネズミさん、私たちのシャモアさんが助かるかどうかは、あなたにかかっているのよ。」

彼は自分ができる限りすばやく駆け出し、シャモアのところにたどり着き、シャモアに言いました。「かわいい人、君はそんなに賢いのはどうしてこの恐ろしい罠にかかってしまったんだ。」シャモアは言いました。「運命がそう定められているときに、誰が知恵を働かせて、それを免れることができましょう。」二人が話していると、カラスとカメがその場にやってきました。

シャモアはカメに言いました。「どうしてあなたは来てしまったの。ネズミさんが私を逃がしてくれたら、私は走って逃げるができるわ。カラスさんは宙に飛びあがることができるわ。ネズミさんは穴を見つけてそこにもぐりこむことができるわ。だけど、あなたはたった一匹で狩人のところに居残らなくてははいけないのよ。」カメは言いました。「お友だちなしで生き残るよりも、死んだほうがましだわ。」彼らがこう言っていると、ネズミが網をかじってシャモアを救いだししました。

すると突然狩人が現われました。シャモアは走って逃げ、カラスは飛び立って逃げ、ネズミは穴のなかにもぐ

りこみました。狩人は何が起こったのかわからずに動転していましたが、一匹のカメを見つけてそれを捕まえ、縛りあげました。

カラスとシャモアとネズミはこれを見て、悲しみに暮れました。カラスは言いました。「俺はいつもこんなふうに不幸な目に遭ってしまうんだ。故郷もなし、身寄りもなし、富も失っただけでは、まだ足りないというのだろうか。俺はいま、俺の大好きだったカメも奪われて一人取り残されてしまった。カメはどんなによく友情の掟を守ってくれたことだろう。こんなたくさんの不幸からできている俺の死すべき体など、なくなってしまえばよい。」

シャモアは答えて言いました。「今となっては、私たちの悲しみとあなたの悲嘆の言葉は、たしかにそのとおりだけれど、そんなものはカメさんには何も役に立たないわ。こんなことを言うのはやめて、カメさんをどうしたら救えるか、何か考えてみましょうよ。勇者は悲しみのときに試されるが、誠実な友人は災難にあったときに試されると、よく言うではありませんか。」

ネズミはこれに答えて言いました。「僕が考えるに、こういうことをすれば、カメさんを助けることができると思うんだ。シャモア君、君は出かけて行って狩人のいる近くの道に死んでしまったかのように横たわるんだ。カラスくんが君のうえに陣取って、あたかも死んだ君の身体をついばむふりをする。狩人がこの光景を見たら、僕が思うに、きっとじっさいに君が死んでしまったと思うだろう。そうしたら、狩人は自分の袋と弓をひとまず置いておいて、君のほうに近づいてくるだろうね。

君はね、狩人が自分のほうに近づいてきたと見たら、立ち上がって、おぼつかない足取りで逃げようとするんだ。狩人は、必ず君に追いつけると確信することだろう。狩人が追いつきそうになったら、今度は君の足のおよぶかぎり全速力で駆けだすがよい。君が追跡から逃げ去っているあいだに、僕はカメさんの縛り紐を齧り切ってカメさんを助ける。」

シャモアは言われたとおりにし、そのあいだにカメはネズミによって救われたのでした。みんな無事で傷も負わず自分の家に帰りました。こんなふうにして、ほんとうに愛する者は自分の友人たちを助けたのです。

王は言いました。「余はこの例え話を理解した。この話の主題は、ほんとうの愛についてであったな。それでは今度は、猫をかぶって親友のふりをする敵から、どうやったら身を守ることができるか、その話をするがよい。」

敵を信じてしまう者には、フクロウに起きたのと同じことが起こります。お話はこういうものです。ある山のうえに大きな高い木があり、そのうえに千羽のカラスが

住んでいました。そのなかに、ある長（おさ）のカラスがいました。その場所からほど遠くないところに、同じように千羽のフクロウが住んでおり、長のフクロウがいました。彼らはいつもカラスと戦争をしていました。あるとき、彼らは真夜中にカラスを攻撃し、多くのカラスを殺し、ほかのカラスたちには怪我をさせ、ほかのカラスたちの羽を引っこ抜きました。カラスの王は意気消沈しました。

会議が開かれました。カラスの王は言いました。「フクロウの一族が我らに何をしたかを、おまえたちは目の当たりにした。彼らが我らの軍をいかにうち破ったかを。どれほどの者たちを殺し、どれほどの者たちに怪我を負わせ、どれほどの者たちの羽を引き抜いたのかを。一番つらく恥ずかしいのは、カラスどもが我らに出陣する勇気を持ち、我らを辱めたことだ。これからどうすればよいか、おまえたちは考えてみよ。」

王には五人の顧問官がいました。そのうちの最初の顧問官は言いました。「このような襲撃から我らの身を守るには、この場所を退去するほかないでしょう。なぜなら、私たちには敵と相対することはできないからです。」

二人目の顧問官はこういいました。「たった一回負けただけで、めげて祖国を離れ、他人の土地に移住するというのは、ただけない話です。勇気をもって軍勢を立て直し、戦争の準備をしましょう。もしも敵たちが我らを襲ってきたならば、彼らと一戦交えましょう。もしも我らが勝利を取れば勿怪（もつけ）の幸い、もしも打破られたならば、最初の助言にしたがったとしても、恥辱は被らないでしょう。」

三人目の顧問官は言いました。「おお王様。彼らの言うことは間違いです。我らはまず、敵が我らと和議を結ぶつもりがないか、たしかめるべきでしょう。平和的な表敬をおこなうために、彼らに贈り物を差し出しましょう。そうすれば、私たちは災難から免れた生活ができるでしょう。王というものは、いつも自分の国のことを考え、配下にいる者たちを黄金によって守るものです。」

四番目の顧問官は言いました。「おまえの助言は穏やかならぬ。この期におよんでは、自分たちより優れ、勝る敵たちに屈服し、事を構えないということはもちろんですが、そればかりでなく、抑圧と不幸を忍んで生き抜く以外の道はないのです。もしも贈り物をもって行ったとしても、彼らがそれに満足しなければ、私たちに私たちができる以上のものを要求してくるでしょう。戦争にならないあいだは、敵を贈り物で懐柔する必要があるが、一度干戈を交えれば、もはや戦いを避けることができないと言われます。平和のためにも、戦争のためにも、忍耐と謙（へりくだ）りが必要です。」

五番目の顧問官は言いました。「敵は我らより強いゆえに、敵対するのは不可能です。より強い者に敵対する

者は、自らに惨害を呼び招くものです。愚かな者たちは自分の敵たちは無力だと言うものです。私はまえもって敵を恐れておくのです。賢い者は、敵が自らの遠くにいる時でさえ、自分の敵を恐れずにいるべきではありません。食べ物の問題になることもあり、飲み物が問題になることもあり、富が問題になることもあるでしょうが、ほかならぬ戦争では、人の命が問題になるのですから。」

王は言いました。「おまえが戦争をしてはならぬと言うのなら、ほかにどんなことをすればよいというのだ？」その者は言いました。「王よ、賢い顧問官をもつことが必要です。なぜなら、よい助言は万の軍勢に勝るからです。なぜなら、王よ、賢い顧問官は有益な手法を考えます。敵の強み、弱みを知っている者がいたら、その者は賢い助言と企図で敵を下すことができるでしょう。」

私たちがフクロウとたがいに敵意を抱くにいたった発端はこういうものでした。昔あるときに鳥類がすべて集まって、鳥類の王にフクロウを選び、フクロウがすべての鳥類の王として君臨するように決めました。そこにカラスがいてこう言いました。『どうして君たちは栄えあるほかの鳥たちのことを忘れて、そうした者たちの誰かを王位に即けないで、こんな臭い鳥を王に選んで、魂の善良さをダメにしてしまおうとするんだい。臭いだけではなくて、フクロウはバカで物わかりが悪くて怒りっぽくてでたらめで狡くて鳥のなかでも最悪じゃないか。』鳥類はこれを聞いてフクロウを権力の座から引きずりおろしました。

フクロウが権力の座から引きずりおろされると、フクロウはカラスに言いました。『おおカラスよ、私は、自分があなたにどんな悪を働いたためにこんな仕打ちを受けたのか、わからない。だが、これだけは覚えておくがよい。斧で切り倒された木はまた生えてくる。矢傷も治って癒える。けれども、言葉で受けた傷は、ましてやそれが心臓に当たってしまったときには、癒えることはない。水は火を消す。毒は薬草で消える。だが、悪意の炎はいつまでも燃えつづける。カラスよ、私たちとあなたたちのあいだにまかれた種から生い育ったのは樫の大木だ。それは決して根こそぎ掘り返せるものではない。』

フクロウはこう言うのと飛び去ってしまいました。カラスは悔いてたいへん悲しくなりました。その時から今にいたるまで、私たちとフクロウのあいだには敵意が存在するのです。」

王は言いました。「それはわかった。だが、これから先のことを言うがよい。いまこのとき何をする必要があるのだ。」その者は言いました。「私は陛下と二人だけで話がしたいのです。」王はこの者に二人だけで話をするのを赦しました。この者は言いました。「戦争にかん

しては、陛下に反論することはありません。戦争という手段に訴えないほうがいいでしょう。けれども、ちょっとした工夫をして事態をうまく運ばなくてははいけません。ちょっとした工夫は多くのことを成功させます。」

思うに、陛下が私に怒りをいただいているさまをみなが見ることが肝心です。みなのもえで容赦なく私を打ちすえるようにお命じください。私が傷だらけ、血まみれになり、私の尾羽が引き抜かれたら、私をこの木の下に放りだすのです。私にこの仕打ちをしたら、陛下は側近の者たちとともにここから退出なさるのです。私を、打ちのめされてここに伸びたままにしておいてください。」王は言われたままのことをして、自分の側近とともにその場を立ち去りました。

夜になってフクロウがその木にやって来て、ほかならぬ打ちのめされたカラスが伸びているを見つけました。彼らはこのことを王に知らせました。王はこのカラスに近づいてたずねました。「おまえはどこから来たのだ。」カラスは王に言いました。「私はかくかくしかじかの者です。」「カラスたちはどこに行ったのだ?」「知りません。こんな災難に遭って彼らの秘密などわかるものですか。」すると、王は言いました。「ほんとうにこの者はカラスたちの顧問官だ。どのような理由でこのような仕打ちを受けたのかを、聞きただすがよい。」カラスは王にこう言いました。「私のバカな助言が私をこんな災難に遭わせたのです。あなたがたがカラスたちをうち破ったあと、カラスたちは会議を召集して、それぞれが自分の考えを披歴しあったのです。私は思いきってあなたがたについてこんなことを申し述べました。」

フクロウはカラスよりも強いし、血筋も尊い。だから、彼らと敵対すべきではない。フクロウとは和議を結び、貢物を献上する必要がある。これを聞いてカラスたちは、あなたがたを利するために私がこう申し述べたと決めつけて、憤怒に駆られてこのような裁きで私を裁くことにしたのです。」

これを聞いて王は自分の顧問官の一人にこう言いました。「我らはこの者をどうすればよいか。」その顧問官は答えました。「このような者は直ちに殺したほうがよろしいです。そうすれば、私たちはこの者の狡猾と悪だくみから免れることができるでしょう。この者はたえず我々にこうした陰謀を企んできたのです。この男を殺すことは、私たちにとって至極有益でしょう。チャンスがあるときに自分の利益を図らぬ者は、別のチャンスも取り逃がすというではありませんか。」

すると、別の王の顧問官はこう言いました。「この者を殺してはなりません。傷ついた輩を折ってはならない⁸と書かれています。この者がかくのごとく殴打され

⁸ 『イザヤ書』43章3節。

るという不運に見舞われた以上は、そのゆえに憐れみを垂れ、褒美をあたえるのが公平なやり方というものです。この者を手厚く保護すべきです。なぜなら、敵を養うのは至極賞賛に値することなのですから。」王はそのカラスを手厚く尊厳をもって養っておくように命じました。このカラスを殺したほうがいいと言った顧問官はこう言いました。「殺さないなら殺さないでけっこうです。ですが、嚴重な警備のもとに置き、この者を敵として監視しておくように進言いたします。この者が残酷で狡猾であることを私はよく知っております。私には、この者が欺瞞を働くためにここに来たように思えてならないのです。」

このカラスはフクロウたちと一対一で話をするようにもなり、彼らと親しく交わるようになりました。ある日、そのカラスは彼らに言いました。「老人たちが話しているのを私が聞いたのだが、もしも火のなかに跳びこむなら、神様をお願いしたことがかたんにかなうということだ。いま私はこれをして神様に切にお願いしたいことがある。私を見かけも中身もフクロウに変えてほしいということだ。そうすれば、私はおまえたちとともにカラスたちのところに出陣して、彼らが私にした仕打ちについて、彼らに思い知らせてやることができる。」

そこには、このカラスを殺すようにと進言したフクロウもいてこう言いました。「おまえのその言葉は、毒に満ちた飲み物に似ている。もしも私たちがおまえを焼かなければ、おまえの見かけと中身を変えることはできないだろう。」

カラスはフクロウのところにおいて、フクロウのあらゆる慣習を観察していました。彼は肥え太って、抜かれた羽も生えてきました。そこで、あるとき、チャンスを見つけて逃げだしました。カラスたちのところに戻ると、そのカラスはカラスの王にフクロウの習慣をすべて告げました。「王様、喜んでください。私は必要なものを手に入れました。フクロウはみんな一本の樹木のなかに住んでいます。いま一斉にみな飛び立ってその木を指して行きましょう。飛行ができる者はそれぞれ、一本の枝をもっていきましょ。その枝で洞の入り口をふさいでしまうのです。それから火をもってきて羽で風を起こしましょう。炎が宙に熾るでしょう。そうすれば、洞のなかである者は煙にいぶされて死に、ある者は外に飛び出そうとして焼け死ぬでしょう。」

このようなことをして、カラスは最終的に自分たちの敵をうち破りました。カラスの王は勝利者として自分の住処に戻ってきました。カラスの王はカラスの顧問官に言いました。「おまえはフクロウとどうでもいいような話をするとき、どんな気持ちで我慢していたのか。」そのカラスは答えました。「もしも賢い人間が不幸に陥ったら、望むものが得られるまで、どんなつまらない者に

さえ服従しなければなりません。」王は言いました。「余に告げてみよ、フクロウは賢かったか。」そのカラスは答えました。「私のかの地で、私を殺せと助言したそのフクロウ以外、賢いフクロウを見かけませんでした。ほかの者たちはとてもではありませんが、賢いなどとはほど遠い代物です。王たるもの、自らの秘密を保持しなくてはなりません。他郷の者の誰にたいしても、文書や、王が水浴する水や、寝台や、衣服や、武器や、食べ物や、飲み物に手を触れさせてはなりません。」

プライドを保ちつつ敵に勝利することなど、できるわけがありません。愚かな顧問官と行動をとるプライドの高い者は、ちっぽけな勝利を収めることはできるかもしれませんが、破滅から我が身を救うことは難しいのです。ガマガエルに服従したヘビが成し遂げた偉業を成し遂げるためには、我々はよく我を抑えて敵に服従しなくてはなりません。

こういう話があります。ある一匹のヘビが年老い、老齢に達し、獲物を追うことができなくなり、このために食べ物に困るようになりました。そうこうしているうちに、ヘビは這ってガマガエルのたくさんいる沼地にたどり着きました。この沼でヘビは獲物を獲ったことがあったのです。ヘビはすっかり疲れ果て、悲しみのあまり沼の近くで伸びてしまいました。一匹のガマガエルがヘビに言いました。「ヘビよ、おまえは何を悲しんでいるのか。」ヘビは言いました。「どうして悲しまないでいられようか。この沼で俺はかつてたくさんのお腹にありついていたものだ。だが、いまある禁欲行者が俺に獲物を追うのをやめると言った。だから、俺はここで狩りができないんだ。いま俺が望むものは、おまえたちの王の騎乗用のウマにでもなることさ。」

ガマガエルの王はこれを聞くと、ヘビの言うことを聞き入れ、ヘビに跨り、そのために毎日ヘビの食用に2匹のガマガエルをあたえました。このようなわけで、勤めで得られる結果のために、私は一時的に耐えがたき悪を耐え忍んだのです。」

カラスの王は言いました。「余はよくよく考え、まともに兵力をぶつけ合うよりも、ちょっとした工夫と知略で勝つほうがよいということがよくわかった。炎は熱く乾いているが、地上にあるものを焼きつくすことができる。水は冷たく静かであるが、地下に浸透し、地下にあるものをすべて根こそぎ壊すことができる。よく言ったものだ、次の四つのは軽んずるべきではない。炎、病、敵、借金だ。」くだんのカラスは言いました。「王よ、そなたは偉大なる業績を成し遂げる巡り合わせとなりました。このことで、神に誉れあれ。」

王は言いました。「そなたが言葉においても行いにおいても、余の友人であることがわかった。ほかの王など、愚かな言葉によって讃えられておればよいのだ。おまえ

のおかげで、余らは大いなる恩恵に与かることになった。甘い眠りと食べ物がおまえのおかげで我々にあたえられたのだ。熱病から救われた者、つらい重荷を降ろした者、敵の手から逃れた者は、大いなる慰めを得るとはよく言ったものだ。そして、最後に余に告げよ。フクロウの王の生活のありさまはどのようなものであったか。」この者は言いました。「家畜のようで、狡猾で、楽しみがなく、無法なものでした。ほかのフクロウも王に似たり寄ったりです。ただ私を殺すように助言した、あの一羽のフクロウをのぞいては。私には、あのフクロウが一番賢かったように思えます。」

王は賢者に言いました。「余はそなたが話したことを理解した。今度は、自分の願いをかなえ、望むものを得たものの、それを大切にとっておくことができず、ふたたび失ってしまう者の話をするがよい。」

サルについての五番目の話。

賢者は言いました。「こういう話がございます。サルたちには、長いあいだ生きて年老いた王がいました。老齢のために、サルたちは王に権力の座から降りてもらうことに決めました。いろいろな困難が襲ってきたために意気消沈したこのサルは、海岸に一本のイチジクの木が立っているのを見ると、その実を食べて生活を立てることにしました。」

そんなふうに毎日を過ごしていたある日、サルが食事をしていると、手からイチジクの実がすべり落ちて、それを野生のカメが取って食べました。サルはそれを笑いましたが、カメは一生懸命食べていました。美味しい物を見つけてカメは家のことさえ忘れてしまいました。カメの旦那さんはこのためにずいぶんと苦しんだので、どうしたらサルを殺して自分の妻を取り戻したらよいか、方策を練りました。

あるときカメは家に戻り、自分の旦那が悲しみに暮れているのを見ると、彼に言いました。「どうしたの。あなたは陰鬱で病気になるってしまったように見えるわよ。」すると、夫は答えました。「俺はひどい病にかかってしまった。サルの心臓を食べなけりゃ、治ることはないだろう。」カメは動揺してこう考えをめぐらせました。「私のお友だちのでなければ、私はサルの心臓などというものを見つけ出すことができない。でも、それは犯罪だわ。」ああでもない、こうでもないと考えながら、あれやこれやの考えに心をかき乱しながら、カメは海岸にやってきてサルを呼び出しました。

サルは、こんなに長いあいだいったいどこに行っていたのかとたずねました。カメは答えました。「こんなに長いあいだ私が不在だったのは、ほかでもない、あなたのご厚情にたいして感謝の気持ちを表すためにふさわしい贈り物が自分にはないので、恥ずかしくてそれがとて

もやりきれなかったからなの。」すると、サルは答えました。「そんなこと、考えないでよ。僕は親しい人から返礼を期待するような者ではないよ。僕が追放され、災難つづきだったときに、僕を慰めてくれたじゃないか。それだけで、君は僕にとって大切な恩人だったんだよ。」

カメは答えて言いました。「私は、私たちのあいだにある友情をもっとたしかなものにしたいわ。それは三つの方法があるの。友人の家に行くこと、親戚の人たちと知り合いになり彼らを訪問すること、そして、一緒に暮らすことよ。」サルは言いました。「友人よ、そんなふうにして友情を固めるのは、だらしのない生活を送っている人たちさ。」カメは言いました。「あなたのおっしゃることは正しいわ。ほんとうの意味での完全な友愛というものは、ほんとうの友人たちと結ぶことができるんだわ。生活の必要に迫られて友愛を結ぶ者は、脆い足もとのうえて関係を結んでいるだけなのよ。だから、大好きな人から期待すべきものは、善良な清らかな心と、まっすぐで真実な信頼だけよ。子牛は、母親からお乳が出なくても、お乳を吸おうとするし、母親から引き離されると、怒りますでしょう。私は、あなたに私のお家を訪ねていただきたいわ。私はたくさん草が生えていて、何万という果実が実る島で暮らしておりますの。私は甲羅にあなたを載せて連れて行って差し上げますわ。」

サルはカメの言うことを信じて、カメの甲羅に乗り、大海原を運んでいってもらいました。大海原の真ん中で、サルを一思いに殺してしまおうと、カメは物思いにふけて立ち止まりました。カメの泳ぎがゆっくりになったのに気づくと、サルはカメに狡猾い魂胆があるのではないかと訝しがって、こう独り言を言いました。「カメは俺にたいして悪い企みをいだいているのではなかろうか」と。

「俺の見るところ、おまえは何か心配事があってひどく物思いにふけているようだな。だから、おまえにどんな心配事があるのか、ちょっと不安になったんだ。」すると、カメは言いました。「私の抱えている大きな悲しみというのは、あなたに私の家に来ていただいたとしても、私が心から望んでいとお、私の家のすべてがあなたのお気に召してもらえないと思うからなの。だって、私の主人がベッドから起き上がれないんですもの。」サルは言いました。「そんなこと、気にしなくていいよ。悲しんだって一文の得にもならないさ。どういう薬草を処方したらいいか、考えたほうがいいんじゃないか。」

カメは言いました。「医者が言うには、サルの心臓が一番効くというのよ。」サルはこれを聞くと、自分が死ぬ運命にあると悟って一人心のなかで嘆きました。「ああ、何と俺はバカなんだろう。どうしてこんなことにもっと早く気づかなかったのか。年老いてから、こんな不幸なことになってしまうとは。平穏な人生が送れるの

は、小さなことに満足する者だけだな。」

しかし、サルはカメにはこのように言いました。「かわいい人、どうしておまえは家を出る前にそのことを言わなかったんだ。そうすれば、俺は心臓をもってきたのに。俺たちの習慣ではね、友だちの家に出かけるときには、自分の心臓を家においてくる決まりになっているんだ。心臓を家においてきさえすれば、心臓が友だちに悪いことを企んだりすることはないんだからなあ。」これを聞くと、カメは喜んで来た道を引き返し、サルを海辺へと送り届けました。

サルは丘に上がるやいなや、すばやくイチジクの木に登りました。カメは下から叫びました。「友だちよ、はやく下りてくださいな。出発しますよ。」サルは答えて言いました。「俺がおまえのところに行ったら、自分の心臓がすっかりなくなってしまう。」以上が、せっかくの機会が到来したのに、自分の企みをすべて実現することができず、時期をいわずらに逃して、何も得られなかった人の話です。

王は言いました。「余はこの話が分かった。それでは、まだそれが何かわからぬうちに、何事かをはじめてしまう者のことを話すが良い。」

賢者は言いました。

このような話があります。ある男が自らの妻とともに暮らしていました。あるとき、夫が妻に言いました。「妻よ、私は確信するのだが、私たちのあいだに男の赤ん坊が生まれて、その赤ん坊が一生懸命私たちに仕えてくれるだろう。どんな名前を私たちはこの赤ん坊にあたえればいいだろう。」妻は言いました。「旦那さま、つまらないおしゃべりはやめておくれ。あんたは、はちみつと油をこぼしてしまった人間に似ているわ。」

その話はこのようなものです。ある貧しい人のところに、ベッドの隣に容器に入ったはちみつと油がありました。ある夜、その人はあることを思いついて次のように言いました。「私は油とはちみつをお金に変えて十頭の山羊を買うことにしよう。五か月もすれば、この山羊は同じ頭数の山羊を生んでくれるだろう。五年もすれば、頭数も四百頭になっているだろう。その山羊を売って、百頭の雄牛を買って、それを使って畑を耕し、その収穫とそのほかの収入で私は際限もなく豊かになり、黄金で屋根をふいた寄棟造りの屋敷を建て、たくさんの奴隷を買い、自分のために子どもを産んでくれる妻を娶り、その子にパンカロス、つまり、『すべての善き者』という名前をつけ、しかるべく彼を養育するだろう。もしも息子が怠けているのを見たら、この棒でひっぱたいやる。」すると、彼は近くにあった棒を握りしめてそれで器を打ちつけて壊してしまった。彼のはちみつと油は、あごひげをつたって流れてしまいったとさ。

そのあと、女は男の子を生み、あるとき夫にこう言いました。「こっちにきて男の子といっしょにいてあげて。」妻はその場を去ると、君主が彼女の夫を呼び出したので、子どもが一人で残されました。すると、たまさか大へびがこの赤ん坊に這いよりました。彼が飼っているココゾイタチが大へびを見て、飛びかかり、自分の歯を大へびにつきたてました。そこに夫が帰り、ココゾイタチが血まみれになっているのを見て、ココゾイタチが赤ん坊を食い殺したのだと思いました。男の子を見る暇もなく、彼はココゾイタチの頭をしたたかに殴りつけ、ココゾイタチを殺してしまいました。部屋のなかに入ると、彼は赤ん坊が無事で、全身がばらばらになった大へびを見て、後悔しひどく泣きました。細心の注意なしに多くのことをおこなう人々は、このような過ちを犯すものです。

王は言いました。「余はこのことがわかった。今度は、王が自分の王国を平穩に保つにはどうすればよいか、どのような場合に温和さ、めでたき良心、あるいは、褒美によって王国を統治すればよいかを教えてくれ。」

賢者は答えて言いました。

何より望ましいものは、賢慮と忍耐です。これに加えて、善き顧問官の助言です。それから、誠実な賢い妻です。さらに、インドの王の身に起こった、ある例え話も役に立つでしょう。

こういう話があります。この王は一晩に八つの恐ろしい夢を見ました。彼は愕然として目を覚まし、自らの賢人たちを呼び集め、彼らにどんな夢を見たかを話しました。彼らは言いました。「あなたがご覧になった幻視は、驚愕に値するものです。この夢を判ずるには、私たちに七日の時間をいただきたい。」

彼らは退出し、口々にこう言い交わしました。「王が我らの仲間を殺してから、あまり時間が経っていない。だが、神慮が王を私たちの手に委ねた。だから、我らは何とかして王が破滅するように仕向けたいものだ。こう助言してやるのがいいだろう。自らの息子と妻、さらに自分の親戚であり首席顧問官であり筆頭書記であるあの男、王が乗っている白いゾウ、さらに別の二頭の大きなゾウ、ウマ、ラクダを殺し、これらの血を一つの器に集めたら、我らはその血で王の身体を洗い、治療の歌を歌えばよい」と。

賢者たちは王のもとへ来ると、こう言いました。「我らは書物を博搜してこれこれの事を見出しました。陛下が助かるためには、これを行う以外に道はありません。」すると、王は言いました。「余は、これらみなもの者たちが無事に生き残り、余自身が一人死ぬほうがよい。」賢者たちは言いました。「自らの命を救うより大切なことはありません。」これを聞くと、王は悲しみに打ち沈み、ベッドにうつぶせに横たわり、どうしたらよいかを考え

ました。誰もが王の悲しみを知ってしまったのです。

これがわかると、主席顧問官は奸計を見抜きました。それについて王に打ち明けて話すことはできませんでした。彼は王妃のもとに参内し、こう言いました。「私は王様が悲しみに暮れているのを見ております。私が恐れるのは、嘘つきの賢者たちが悪意から陰謀をたくらみ、王様のことを完全に破滅させてしまうような助言をしたのではないかということです。ですから、王妃殿下におかせられましたは、王様がなぜそのように悲しみに沈んでおられるのか、その原因を探ってはいただけないでしょうか。もしも王様が妃殿下にお話しくくださったなら、私にお知らせください。」

王妃は王のもとにゆき、王の枕元に座ってこう言いました。「王様、賢者たちがどんな助言をしたのかを、私にお話してください。」王様は言いました。「傷に塩をぬってくれるな。おまえは余にそのことを聞いてはならぬ。おまえにこのような禍々しいことを解決することなどできないのだから。」王妃は言いました。「陛下がいつしか私に秘密を御隠しになるだろうとは、私は思ってもおりませんでした。陛下が私にそれを打ち明けてくださらないなら、陛下がほかの者たちにどうして秘密を打ち明けることができましょうか。」王様は言いました。「おまえが余にたずねるのは、おまえ自身と余の愛しい者たちの死なのだぞ。」

王妃は言いました。「私も、ほかの者たちも、陛下の身代わりになることを厭いません。私たちにとって、陛下ほど大切な存在がいらっしゃいますか。けれども、私には一つお願いがございます。私が死んだとしても、あの賢者たちの誰一人も信じてはなりません。それから、自分の近しい者たちに彼らの助言の内容を打ち明けることなく、誰をも殺さないでください。いったい陛下はあの賢者たちが陛下に悪意をいだいていることがお分りにならないのですか。陛下が多くの賢者たちを殺められたのはつい先だつてのことだったではありませんか。彼らが、仲間が殺められたことを忘れたと思ってはなりません。」

そもそも陛下は彼らに自分のごらんになった夢のことを話すべきではなかったのです。もしも私を信じてくださるなら、私たちのもとにいる禁欲行者の老人に、夢についてたずねてごらんになるのがよろしいかと思えます。」

王はすぐにもウマに跨り、その行者のもとに出かけました。王はこの行者に自分の見た夢についてすべてを話しました。行者は言いました。「王様、恐れることはありません。あなたの御身には、どんな悪いことも起こらないでしょう。あなたのご覧になった尾で歩く二匹のサカナの夢は、すなわち、大王から陛下に遣いがやって来て、陛下に二頭のゾウを曳いてくるということです。二羽のカモがあなたの周りを飛び回っている夢は、二人の

ベルシア人の使者たちが二頭の血統のよいウマを連れてくるということです。あなたのあとを這ってきたというヘビは、陛下に誰もみたことがないような剣が献上されることをあらわします。陛下が血で水浴するのは、闇のなかで輝く緋の衣を陛下が贈り物として受け取られるという意味です。水で身体を洗うということは、さまざまな衣類が届くということを示唆します。白い山のうえに登るということは、白いゾウのうえに乗るというたしかかな徴です。陛下の頭上にある炎は、大王から尊い王冠を受け取ることを予見しています。そなたがトリのような頭をしているということの意味は、いまだ陛下には明らかになっておりません。それは小さな悲しみと、愛する人から遠ざかるということを語っています。いま申し上げたことは、七日後に実現するでしょう。」

七日後にそのとおりのことが起こりました。遣いがやって来て行者が予言した物をすべてもってきました。これを見ると、自らの近しい者たちからの助言だけを受けいれようと、王は心に誓いました。そのあと、王は贈り物を見て次のように言いました。「これらの贈り物をどれ一つとして余は受け取ることがふさわしくない。わが友人たちよ、そなたらが我が賢き妻とともに、この贈り物を受けるがよい。なぜなら、余のかわりに自らの命を懸けてくれたのだから。」

主席顧問官は言いました。「我らがごとき僕（しもべ）が贈り物を受け取るのはふさわしくないでしょう。そなたの血縁の者がこれらを受け取るのがはるかにふさわしいでしょう。」王は言いました。「そなたがいたからこそ、余は救われた。どれだけ感謝してもその感謝が尽くされることはない。」

そのあと、王は自分のために白いゾウを取り、自分の息子にはウマのうちの一頭をあたえ、主席顧問官には高価な剣を一振りあたえました。残余のものは、自らの王妃たちに取りさせるように主席顧問官に命じました。王には、二人の愛する王妃がいました。禁欲行者の話を聞くように助言をあたえた王妃と、もう一人の王妃です。王は彼らのもとに来て、彼らのまえに王冠と緋の衣とを置き、まずは助言をくれた王妃に言いました。「二つのうち、そなたが欲しいものを取るがよい。王冠か、緋の衣か。残ったものを、もう一人の妃がとるがよい。」

その王妃はどちらを取ればよいか、迷いに迷ったすえ、主席顧問官のほうを見ました。主席顧問官は、目くばせで緋の衣を取るよう促しました。たまたまそのとき、王は視線をあげて、主席顧問官が自分の王妃に緋の衣を勧めているのが目に入りました。その王妃は、王からはこの動きを隠すことができないと考え、緋の衣を取らず、王冠を取りました。主席顧問官はそのときから四十年のあいだ、視線を下に向けて過ごしました。それは王が、彼の視線に情欲が宿ったことを見咎めないため

でした。そのようにふるまわなければ、主席顧問官は命を失ったことでしょう。ある日、王冠を取った王妃は…。

どこかの写字生がこの賢さに溢れた例え話を最後まで書き終えなかった。愛しい者たちよ、そろそろ私は、父親からのこの甘い教訓話を終える時が来た。人間を愛する神様が自らの恩寵と自らの聖者たちの祈りによって、私たちを庇護してくださいように。なぜなら、そなたは永遠に祝福すべきだから。アーメン。

この例え話は、七千年紀の最後の世紀の八七年目⁹に書かれた。聖なる三位一体よ、そなたに誉れあれ。ギリシア語からロシア語に翻訳された。

⁹ ビザンツ暦 6987 年は、3 月を年初とする旧旧暦ならば、西暦 1479 年 3 月 1 日から 1480 年 2 月 29 日まで、9 月を年初とする新旧暦ならば、1478 年 9 月 1 日から 1479 年 8 月 31 日まで。両方の可能性がある。